平成10年度　第37回北海道高等学校登山大会兼全国高等学校総合体育大会北海道予選会

期　日　平成10年６月24～26日
場　所　アポイ岳、新冠富士（イドンナップ）
当番校　静内高等学校
成　績　男子　１位　旭川東高等学校
　　２位　札幌南高等学校
　　３位　富良野工業高等学校
　　女子　１位　北見北斗高等学校
　　２位　江別高等学校
　　３位　札幌稲西高等学校

今大会の会場となった日高山脈は、地質学的にアルプスやヒマラヤと似た成立過程を辿った。１億５千万年～１千５百万年前、海底に溜まった土砂が非常に強い力で押し上げられて、岩石の性質が変えられてしまったのである。また、浸食も激しく、現在のような複雑な構造をもった山脈になったのである。そして氷河時代に、山脈のいただきに小さな氷河がかかり、沢山のカール地形を残すこととなった。

北海道の山名にはアイヌ語が多く、会場となったアポイ岳は、アペ・オイ・ヌプリ。昔、祈りのためによく火を焚いたことからつけられた(「火の多くある山」の意)。イドンナップ岳は、「蟻のいる山」のことである。

浦河町総合文化会館で行なわれた開会式のあと、様似町教育委員会の田中正人氏が「アポイ岳の自然と課題」というテーマで講演された。810.5mしかない山だが、地下60～70kmのマントルが上昇露出したとされる幌満カンラン岩(超塩基性岩）という特殊な土壌条件や、海に近く霧や強風の影響を大きく受け、しかも雪が少ないという気象条件により、稜線部にヒダカソウやエゾコウゾリナ、アポイカンバなど数多くの固有種が生育しており、早池峰山、白馬岳とともに特別天然記念物に指定されている。近年、盗掘が多いため、今年からお花畑に防止用カメラが設置された。嘆かわしいことである。

１日目はアポイ岳。様似町の登山口から約１時間で５合目の避難小屋に到着。視界が急に開け、山頂を眺めることが出来る。標高350ｍでハイマツが現われることに驚き、可憐な花々を見ながら頂上を目ざす。約１時間でダケカンバ林の頂上に到着。ハイマツ→ダケカンバという、この山の垂直分布の特徴に再び驚く。

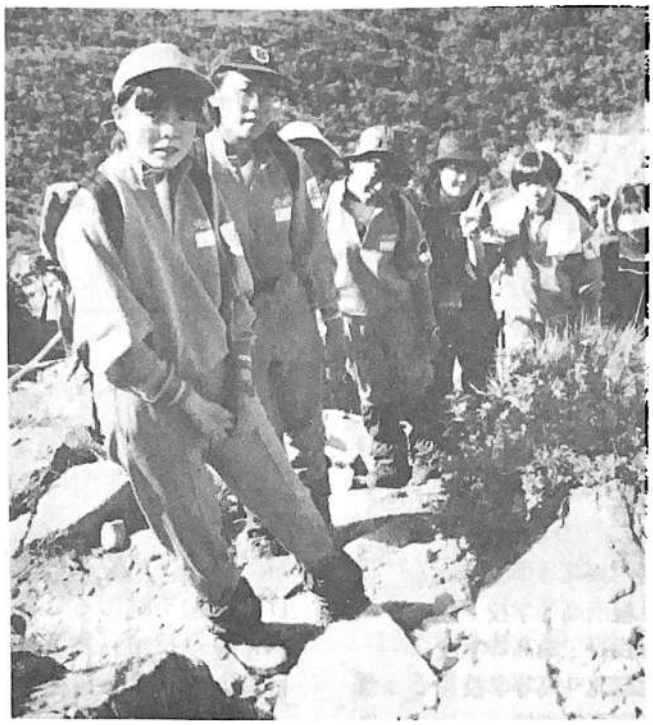
下山後、昼食をとってからバスで静内町まで戻り、国道から約60km、２時間走って、ようやく新冠湖のほとりのイドンナップ山荘に到着。

２日目は、男女とも11時間のきつい山行。男子隊はシュウレルカウシュペ沢の遡行で、地下足袋に履き替えて沢に入った途端に、同行したハンターが熊の足跡を発見して一瞬緊張。途中、落差６～７ｍのＦ１、３段10ｍのＦ３を巻きながら源頭に辿り着く。刈り分け道を登りつめて夏道に出ると、20分ほどで新冠富士（1,660ｍ）である。男子隊から遅れることおよそ30分、新冠山岳会が切り開いてくれた新道を登ってきた女子隊も到着。頂上からイドンナップ岳までは道がなく、ハイマツをこいで行かなければならないため、ここから引き返したが、好天に恵まれて日高の山脈をじっくり眺望でき、一同感激。

女子隊は登山道の往復だったので、男子隊よりきつかった。尾根取り付き地点から売山コルまでは急な登り、コルから先は尾根道であるが、途中アップダウンがあり精神的に疲れるコースであった。その分だけ充実感を味わったのではないだろうか。

夜はジンギスカン鍋を囲みながら、交流の輪がひろがった。静内高校の皆さん、有り難う。

（報告、審査委員長　中森　　司）



第37回　北海道高等学校登山大会日程

日	時	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19
1日目	6／23(火)	札幌 10：00 → 浦河（道南バス） 13：00 苫小牧 10：50 → 浦河（ＪＲ） 13：25								専門・審査委員会	受付 開会式	テスト・監督会議	講演	宿舎へ移動 優駿の里	夕食	懇親会
	6／24(水)		6：30 バス移動	7：10 登山開始 8：10 避難小屋着 9：50 山頂着 10：00 山頂発 12：00 登山口着						12：10 バス移動	14：10 静内高校着		16：10 イドン ナップ山荘着	天気図	諸幕夕 注意 営食	
2日目	6／25(木) A	5：00 バス移動	5：40 5：50 6：10 7：40 8：30 9：50	シェーレル林道入口 登山開始 沢分岐 640m三股 Ｆ１ 1050m			10：30 11：30 12：00 14：20 15：30	最終水場 新冠富士 下山開始 売山コル 林道入口着					16：00 移動 山荘着		18：00 夕食交流会	
	6／25(木) B	バス移動	5：20 5：30 6：00 6：50 8：30	サツナイ林道入口 登山開始 尾根取付 売山コル 第２岩場			11：45 12：15 15：15 16：15	新冠富士 下山開始 売山コル サツナイ林道入口					16：30 移動 山荘着		18：00 夕食交流会	
	6／25(木) C	バス移動	8：00 8：10 8：50 11：40 12：00	ピセナイ林道入口 登山開始 登山口着 ピセナイ山頂着 下山開始			13：30 14：00	登山口 ピセナイ林道入口					バス移動	17：00 山荘着	18：00 夕食交流会	
3日目	6／26(金)	朝食	テント撤収 6：00 バス移動		8：30 静内温泉着	入浴 審査	10：30 閉会式	解散　静内高校までバス輸送 静内 11：25 → 札幌（道南バス） 14：00 静内 13：51 → 苫小牧（ＪＲ） 15：25								

登　　山

専門委員長　種　市　敏　則
現勤務校　札幌新陽高等学校

37年の歩みと現況

登山専門部の歩みは、昭和37年の第１回全道高等学校登山大会に始まります。

登山専門部が承認されるまでの10年間は、高校関係者の遭難事故が多くありました。そのため、登山は危険という通念が広まり、高校登山の活動は多くの学校が制限するようになりました。

危機感をいだいた当時の登山部顧問が中心となって、高体連への加盟、安全登山のあり方、技術向上のための研修会実施、北海道大会開催が真剣に話し合われ、これが北海道高体連登山専門部設立の始まりでした。(30周年記念誌から)

ただ、高体連への加盟まで大変な苦労があったと聞いております。部外者からは、ａ）登山部を認めたら遭難が増えて高体連にマイナスとなる。ｂ）登山は他との競技が成立せずスポーツではない、ｃ）学校というエリアの中での活動ではなく認められない、などの意見が強く、加盟はあっさり否決されたそうです。その後の粘り強い説得があって、昭和36年に高体連総会で承認されました。

翌37年、さっそく、第１回全道高等学校登山大会が、大雪山系で盛大に開催されました。参加は34校でした。

その後毎年全道大会を開催し、昨年が第37回大会でした。北海道選抜チームが、全国大会で優勝（優秀校）するのは第４回大会選抜の増毛高校に始まります。以後、旭川東、標茶、函館有斗、標茶農業、芽室、函館白百合、旭川東栄、小樽工業と続きました。

今日、中高年の登山人口は急増していますが、高校生の登山部への加入は減少をたどり、過疎地で特に激しく、伝統ある登山部が存続の危機にあることは、全国的傾向であるばかりでなく、高体連に加盟する他団体にも共通の悩みです。北海道高体連が50周年を迎えたことは大きな節目であり、大きな曲がり角であると思われます。今後のさらなる発展を念願しております。

※資料(1)　第１回～第37回大会までの歩み

回	年	会　　場	当　番　校
1	S37	大雪山連峰	旭川東
2	38	大雪山連峰	上川
3	39	ニセコ連峰	倶知安
4	40	富良野岳・十勝岳	富良野
5	41	十勝岳・美瑛岳・美瑛富士	美瑛
6	42	樽前山・風不死岳・恵庭岳	苫小牧東
7	43	ウペペサンケ	帯広三条
8	44	芦別岳・富良野西	芦別
9	45	横津岳・駒ヶ岳	遺愛女子・函館西
10	46	大雪山連峰	旭川商業
11	47	知床連峰	北見柏陽
12	48	十勝連峰	旭川東
13	49	天狗岳・余市岳	北海道工業
14	50	羅臼岳・羅臼湖	標茶農業
15	51	夕張岳（日陰の沢）	美唄工業
16	52	天塩岳	士別
17	53	大千軒岳	函有斗・白百合・ラサール
18	54	室蘭岳・カムイヌプリ	室蘭工業
19	55	ニセコ連峰	小樽工業
20	56	空沼岳・札幌岳	札幌慈恵女子
21	57	夕張岳	夕張工業
22	58	暑寒別岳・雨竜沼	砂川南
23	59	富良野岳・芦別岳	富良野工業
24	60	斜里岳・羅臼岳	網走南ヶ丘
25	61	雄阿寒岳・雌阿寒岳・阿寒富士	標茶
26	62	羊蹄山・アンヌプリ・チセヌプリ・目国内岳	札幌新陽
27	63	ウペペサンケ・ニペソツ	帯広柏葉
28	H1	駒ヶ岳・狩場山	函中部・遺愛女子・桧山北
29	2	幌尻岳・戸蔦別岳	苫小牧東・静内
30	3	羊蹄山・目国内岳・雷電山	倶知安
31	4	富良野岳・芦別岳	富良野
32	5	夕張岳	夕張緑が丘実業
33	6	知床硫黄山・羅臼岳	北見北斗
34	7	余市岳・無意根山	札幌稲西
35	8	沼の原・トムラウシ山	帯広農業
36	9	恵山・海向山・白水岳・遊楽部岳	函館東・桧山北・ラサール
37	10	新冠富士・イドンナップ	静内

※資料(2)　現在の審査基準

大項目	小項目	配点	
行　動	体　　力	30	・１日目、２日目、３日目の山行に応じて配分 ・リタイヤした日は０点
	歩行技術	20	・リズムバランス、スリップ、ふらつき、歩幅等にチェックあれば減点
生　活	装　　備	10	・装備一覧から指定し、装備チェックを実施 ・山行中に不備があれば減ずる
	設営撤収	5	・設営用具は万全か、作業の連携、張り網やペブの具合、完成度
	炊　　事	5	・炊事用具、炊事の手順、献立の内容、計画書と一致か
知　識	気　　象	5	・天気図記号の記入 高気圧、低気圧、前線の記入、等圧線、予報、完成度についてチェック
	計画記録	5	・計画書２点、記録書３点
	行動中テスト	5	・山行中に何回か行動中の読図、地形、自然についてテストする
	ペーパーテスト	10	・山の基礎的知識を確認する。専門的になりすぎないこと
態　度	パーティシップ・マナー・モラル	5	・キャンプ地でのマナー、行動中のマナー（集合時間を守るetc.）
		100	

平成11年度　第38回北海道高等学校登山大会兼全国高等学校総合体育大会北海道予選会

期　日　平成11年6月17～19日
場　所　十勝岳、美瑛富士、オプタテシケ山
当番校　富良野緑峰高等学校
成　績　男子　1位　札幌南高等学校
　　2位　旭川東高等学校
　　3位　函館ラサール高等学校
　　女子　1位　北見北斗高等学校
　　2位　江別高等学校
　　3位　札幌稲西高等学校

今大会の会場となった十勝連峰は2000m級の山々が連なった活火山の山塊である。最近では昭和63年に十勝岳が噴火し、麓の集落にも数々の被害を与えたのは記憶に新しい。活動が落ち着いた今、どんな様相を呈しているのか興味の尽きない山行となった。

前日の開会式は富良野市にできた新設校、富良野緑峰高校で行われ、開会式後のペーパーテストでは、地図から読み取る十勝連峰の細い地形や特徴、断面図などの出題がなされ、また研究課題である「雪上歩行」から、歩行技術や雪目の処置法、ガレ場で起こりがちな捻挫の処置法などが出題され、各選手達も真剣に取り組んでいる姿が見られた。

引き続き行われたアトラクションでは、富良野緑峰高校の中庭に設置された高さ16mの人工壁を使ってフリークライミング体験が行われた。全国的にも、フリークライミングに競技としての注目が集まり、数年後には、国体種目に入る予定のものだけに、実にタイムリーで興味深いものであった。経験のある先生方に確保をお願いして、各パーティーのメンバーが1人ないし2人、難易度の異なるルートのクライミングに挑んだ。最後まで登り切ったものには、暖かい拍手と歓声が送られ、途中で動けなくなり落下する姿にはどよめきが起っていた。選手の多くがクライミングを体験し、その楽しさ難しさを知る機会を与えてくれた当番校並びに登山専門部に心からお礼を申し上げたい。

アトラクション終了後は、バスに分乗し、宿舎である大雪青年の家まで移動、大会に備えて十分な休息をとる。

翌、大会日程一日目は、バスで登山口である十勝岳温泉まで移動し、登山開始。山々の中腹までは視界がきくのだが、尾根から頂上への稜線は雲に覆われており、天候の予測がつかない。三段山への分岐を左に見て安政火口に向い、途中よりD尾根へ入って階段状の登りで一気に高度をかせぐ。尾根に出ると強い横風に襲われ、ガスの中へ。展望はほとんどきかず、風速10m程度の風の中を進むこととなった。展望がきかない変わりに、足下には雪渓が現れ、雪渓あとを中心にキバナシャクナゲやショウジョウバカマなどの咲き始める姿が見られた。

強風の中、読図や火山などについての行動中テストを行いながら進む。上富良野岳、上ホロカメットク山を経て、むき出しの山容を持つ十勝岳へ。登山道はガレが多く、足をとられる選手も目立った。しっかりとガレ場を踏みしめるような歩き方を心がけるという歩行技術に対して審査委員から指摘があった。

今回の山行の最高峰十勝岳（2077m）からは、グラウンド火口、スリバチ火口の間を通って一気に下る。下山口の望岳台までは急な下りを雪渓を使って下り、快調なペース。途中、火山性ガスにまかれて咳込む場面もあった。生きている火山という実感を得た瞬間であろう。

一日目下山後は幕営、気象、食料の審査。10分というテント設営時間の中で設営を完了できないパーティーもあった。最悪のコンディションでの幕営を想定すれば、練習しておきたい。気象も練習不足。気象予測は登山において死活問題になり得る。日頃の鍛練を期待したい。

二日目は女子が美瑛富士、男子がオプタテシケ山を目指して歩みを進めた。尾根上ではあい

かわらず強風であったが、中腹は風も弱く気持ちよく歩けた。風や噴火の影響か矮小化したアカエゾマツやハイマツが大岩連なる土壌に密生する天然庭園を越え、いくつもの雪渓を踏んで高度をかせぐ。今回の研究課題であった雪上歩行はやや不慣れが目立ち、練習の必要性が感じられた。美瑛富士避難小屋から男女のルートが別れる。女子は美瑛富士の山頂へ。展望こそきかなかったが、コケモモ、キバナシャクナゲ、ミネズオウ、コメバツガザクラなどの高山植物が迎えてくれていた。男子も縦走路のアップダウンを繰り返しながらオプタテシケ山へ。ナキウサギの声やリスの姿を目にしながら、強風に耐えての貴重な山行であった。

最後に、今回の大会の運営に当たられた、富良野緑峰高校の皆さん、並びに旭川支部の顧問の先生方に心から敬意を表したい。

どうもありがとうございました。

（報告　審査委員長　内海　健一）

第38回　北海道高等学校登山大会日程表

日	時	5:00	6:00	7:00	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00
前日										専門・審査委員会受付	開会式	テスト・監督会議	クライミングアトラクション	移動	青年の家着			就寝
第1日目	A隊・B隊		朝食		バス移動 十勝岳温泉			上ホロカメットク山	十勝岳着		望岳台着		白金キャンプ場 テント設営	天気図・炊事				
第2日目	A隊		登山口発 バス移動			美瑛富士避難小屋			オプタテシケ山発 オプタテシケ山着		美瑛富士避難小屋		登山口着・バス移動	白金温泉キャンプ場				就寝
	B隊		登山口 バス移動			美瑛富士避難小屋		美瑛富士着	美瑛富士発	美瑛富士避難小屋		登山口着・バス移動	白金温泉キャンプ場					就寝
第3日目	A隊・B隊			審査委員会	テント撤去	閉会式												

第39回全道高等学校登山選手権大会兼第44回全国高等学校登山選手権大会北海道予選会

期　日　平成12年6月21～23日
場　所　斜里岳・雄阿寒岳
当番校　釧路湖陵高等学校
協力校　釧路支部高等学校山岳連盟加盟校
参加校　男子16校・女子6校
成　績　男子　1位　札幌南高等学校
　　2位　旭川東高等学校
　　3位　札幌稲西高等学校
　　女子　1位　北見北斗高等学校
　　2位　旭川東高等学校
　　3位　江別高等学校

会場の斜里岳は知床半島の基部、知床山系と阿寒山系を結ぶ位置にありやや独立峰的な山である。雄阿寒岳は阿寒湖をはさんで雌阿寒岳と向かいあっている。阿寒湖畔にそびえ立つ雄阿寒岳は、深い針葉樹林におおわれた静かな山である。前日の開会式は摩周国際ホテルで行われ、開会式後のペーパーテスト、講演会、天気図テストが行われた。ペーパーテストでは深田久弥の日本百名山の中からも出題されていました。山に登るだけでなく文学にも親しんでほしいという出題者の願いが感じられました。以下、今大会の審査委員会で話しあわれた内容について記してみたい。

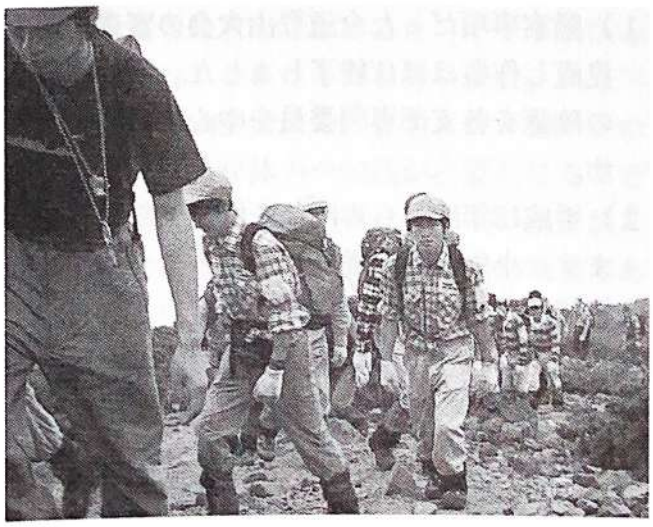
天気図について、難しかったと思うが、天気図の意味をきちんととらえ、実用性について考えてほしい。

体力・歩行について、雪渓の歩き方については練習不足と思われる。急斜面での体力不足が感じられた。女子は全パーティーとも頑張っていた。

設営・撤収・装備について、フライをきちんと張る必要がある。メーカーの指示通り張る。ペグの正しい使い方、いい場所を選んでテントを張るほうがよい。防水処置が不十分である。ザックのひも類をブラブラさせない。防寒具の用意が不足である。ズボンにジーンズを使用している人がいたが山には使用しないほうがよい。

炊事・記録・計画について、研究課題の研究が少し不足である。記録については時間は書かれている場所と標高の関係が書かれていない。つぎの山行に役立つ記録であってほしい。炊事場はきれいに使用されていて大変よかった。灯油コンロで火を噴いていたのがあった。山行前に充分な整備が必要である。人命にかかわる場合があるので心してほしい。防水板、コンロ台は必需品であろう。ガス量の多いチームがある。必要量を持参すること。

テント場での過ごし方、マナー等について、夜遅くまで交流していたチームがあったが時と場を考えて行動して欲しい。沢コースもあり渡渉もいくつかあったが前の伝令がきちんと伝わらず同じ場所で木に頭をぶつけるチームもあった。行動中の会話が多すぎでないかという声もあった。



大会2日目　雄阿寒岳5合目を行く男子隊

行動テスト、読図に学校差があった。地形図の学習を深めて欲しい。それが楽しい安全登山に結びつきます。

まとめにかえて、2日間快晴で参加者全員が登山を楽しむことが出来ました。最後に、今回の大会運営に当たられた当番校の皆さん、関係者各位に心からお礼を申し上げます。どうも有難うございました。

各支部で登山部員が少なくなっております。山のすばらしさを伝え仲間を増やして下さい。楽しい山行を続け、思い出に残る充実した高校生活を送って下さい。

報告　審査委員長　富良野緑峰高等学校
松　田　記　慶

★専門部から

＜第1回道高体連登山専門委員会＞

日時　平成12年5月15日
場所　新陽高等学校
議題　①平成12年度北海道登山大会の実施
②審査基準の改訂
③その他報告

＜第2回道高体連登山専門委員会＞

日時　平成12年6月20日
場所　光風苑・摩周国際ホテル
議題　①平成12年度北海道登山大会の確認
②審査基準の確認
③審査員認定講習の実施

＜第3回道高体連登山専門委員会＞

日時　平成13年1月（予定）

1）懸案事項だった全道登山大会の審査基準の見直し作業はほぼ終了しました。新しい基準の確認を各支部専門委員を中心にお願いします。

2）平成13年度から専門部を函館支部に移管します。小生が専門委員長になって4年、ご理解ご支援をいただき有難うございました。

専門部委員長　種　市　敏　則

第40回全道高等学校登山選手権大会兼第45回全国高等学校登山選手権大会北海道予選会

期　日　平成13年6月20日(水)～22日(金)
場　所　羊蹄山・ニセコ山系
当番校　小樽潮陵高等学校
協力校　小樽工業高等学校
　　札幌支部高等学校産山岳連盟加盟校
参加校　男子17校・女子9校
成　績　男子　1位　札幌南高等学校
　　2位　札幌工業高等学校
　　3位　八雲高等学校
　　女子　1位　旭川東高等学校
　　2位　北見北斗高等学校
　　3位　北星学園女子高等学校

11年前に全国大会が行われた羊蹄山・ニセコ山系を会場として開催されたが、前回同様、悪天候であった。「蝦夷富士」の名で親しまれている羊蹄山は、正式には後方羊蹄山（シリベシヤマ）という。倶知安町・ニセコ町・真狩村・喜茂別町・京極町に跨がる標高1,893mの独立峰で、付近一帯は支笏湖国立公園に指定されている。頂上付近には二百数十種類の高山植物があり、エゾツガザクラやメアカンキンバイはここが南限である。開会式後に、ペーパーテストが行われた。その後、岩瀬隆則氏の講演（「登山にかかわる地学の知識」）があり、4時からの天気図作成は、高気圧と低気圧が近くにあるため、等圧線をどう書くか試される天気図であったが、全般的に良く書けていた。事前に提出させた計画書についても、チェック項目を全て網羅しており、防水の工夫が見られた。

1日目の羊蹄山（真狩コース）、2日目のチセヌプリ～ニトヌプリ～五色温泉とも、殆ど雨具を着用しての行動となった。泥道、岩場、雪渓上を歩き慣れているパーティと、そうでないパーティの体力・歩行技術の差がはっきりでた大会であった。特に女子隊にその差が大きかった。行動中のテストについては、読図を含めて出来がよくなかった。装備については、湯を沸かす道具、ツエルト、薬品、ヘッドランプ、コンパス、非常食の6点についてチェックしたが、非常食の少ないパーティが見受けられた。

テント設営は10分以内に完了しなければならないが、特に雨の降っている時には、素早く行う必要がある。作業している間、ザックを濡らさない工夫も考えなければならない。また、ペグの打ち方や張り網の調整がきちんと出来ていないと、大雨や強風の時に困ることになる。その後の炊事については、予備のガスが少ないパーティ、逆に多すぎるパーティが見られた。2個が適当であろう。

行動後に提出する記録は不十分であった。再度登る時や後輩達に役立つ為には、何を書いておくべきか、もう一度考えてほしい。

1年以上も前から準備された当番校の皆さん、御苦労さまでした。来年度の大会は、久しぶりに沢歩きをします。

大会2日目　イワオヌプリを登り始める男子隊

優勝の喜び〈登山　男子〉

札幌南高等学校

今年度の北海道大会は、別名「蝦夷富士」とも呼ばれる羊蹄山、及びニセコ山系を舞台として行われました。第１日目は天候に恵まれず、一日中雨の中での行動となりましたが、北海道を代表するような、これら雄大な山々の中で他校のパーティと各々の力を競い合うことが出来、加えて念願の優勝を手にすることが出来たのは本当に幸福でした。

この大会は、３年連続優勝がかかった、クラブの歴史上も重要な大会でした。支部大会では予想外の２位で、そのリベンジということで気合いを入れ直して臨んだことがメンバーの一致団結を生み、かえって優勝への原動力となったのかもしれません。大会前に何度も登った藻岩山登山トレーニングなども効果的でした。これからも後輩に引き継いでいきたいと思います。

この夏の全国大会は熊本県下、世界一のカルデラを有する阿蘇山域で開催されました。熱中症でリタイアするパーティが出る程の暑さの中での行動となりましたが、その暑さにもやられることなく、阿蘇のダイナミックな景観を満喫することができました。目標としていた入賞には届きませんでしたが、メンバー４人で頑張ったこの大会は一生の思い出になりました。

最後にこれまで指導して下さった顧問の先生方、応援してくれた部員、そして北海道大会実施にあたって尽力して下さった当番校を始めとする各学校、先生方に心から感謝します。

（主将　村松　俊輔）

優勝の喜び〈登山　女子〉

旭川東高等学校

３度目の正直という言葉通りに、私達４人は優勝を勝ちとることができました。１年生の時から今回まですっと同じメンバーで全道大会に出場することができて私達は本当に幸せでした。しかし陰では３年間全道大会に出場できなかった３年生の女子３人が支えてくれていたからこそ成し得たものが山ほどあります。みんなで一緒に学校の周りを何周も走り込んだり、冬は室内で筋トレ、階段の上り下りで足腰を鍛えました。大会が近くなると毎日のように学校の前庭でテント設営をタイムを計りながら練習しました。

大会中は今年こそ全国に行く！と気合いで臨んだものの様々な点で力不足を感じたり、精神的にきつかったりもしましたが、４人がみな同じ気持ちを持って最後までがんばり抜いたからこそ、全国への切符を手にすることができたのだと強く感じています。今まで私達を支えてきて下さった先生方、先輩、後輩、そして同級生には感謝の気持ちで一杯です。

全国大会は阿蘇山ということで私たちの最大の課題は暑さです。暑さに耐えられるように、これから１ヶ月間頑張ってみようと思います。北海道の代表として、そして３年間の集大成としての最後の山行を４人で精一杯楽しんできたいと思います。

（主将　金　　美善）

登　山

専門部長　宮　下　　勤
専門委員長　中　森　　司
〒040-0012　北海道函館市時任町 11-3
北海道函館中部高等学校
TEL　0138-52-0303
FAX　0138-52-0305

◎第41回北海道高等学校登山選手権大会兼
第46回全国高等学校登山選手権大会北海道予選会

期　日　2002 年 6 月 26 日(水)～28 日(金)
会　場　美唄山・樺戸山地
当番校　北海道美唄工業高等学校
協力校　北海道岩見沢東高等学校
成　績　男子　第１位　北海道札幌工業高等学校
　　第２位　北海道旭川東高等学校
　　第３位　北海道江別高等学校
　　女子　第１位　北海道北見北斗高等学校
　　第２位　北海道旭川東高等学校
　　第３位　北海道八雲高等学校

登山１日目は樺戸山地。標高は１０００m前後と、決して高くないものの、日本海側からの冬の厳しい季節風に叩かれるためであろう、樹林限界は極めて低く、積雪期に山スキーツアーでも計画すればコンパクトで快適な山旅ができそうだ、などと思いつつ深い谷を覗き込みながらの高度感のある尾根歩きを楽しんだ。見事に晴れ上がった空の下、今回のコース中最高峰のピンネシリ山頂からは、噴煙立ち上る十勝岳はもちろん、遙か遠くまで私たちの知る主だった道内の山々がひとつひとつ確認できた。

日射がきつく、気温がぐんぐん上がり、風もあまりなかったせいか、体力を消耗して本隊から離脱した男子３パーティ、女子１パーティがリタイア扱いとなったのが残念であった。

２日目は沢歩き。標高１０００m足らずの美唄山を目指しての登高である。大勢でぞろぞろと歩くには沢の規模が小さすぎで少々窮屈な感は否めないが、小滝群が連続して小気味好いルート。沢歩きの醍醐味を楽しむとまではいかないまでも、沢歩き初体験の高校生たちにも貴重な体験だったと思われる。稜線に上がる手前、最後の若干の藪こぎもまたよい経験。

審査委員会では、細かい各点で技術の向上・知識の習得などが求められるという指摘がなされる一方、全体として参加生徒は炎天下長時間よく歩いたことが高く評価された。また、今回全道大会に初参加した学校を迎えたことも、大会参加校が固定化されその数も目減りしつつある現在、喜ばしいこととして話題にのぼった。

さて、登山という行為の原点は、自由で楽しいという感覚にある。登山している当事者自身が楽しくておもしろいと感じることが原点にないならば、豊かな肉体的・精神的・知的行為としての登山は成り立つまい。そういう原点を私たちは見失いたくない。大会初日の講演は、聞いていた高校生にたっぷり元気を吹き込んでくれた。講演者は２年前世界最高峰チョモランマに登頂した道内初の女性高橋留智亜さん。演題はズバリ「楽しい登山はやめられない」高校生諸君が今後も彼らのスタイルで高級な「遊び」としての登山を末永く楽しんでいってくれることを願いながら、大会の全日程を終了した。

文責　審査委員長　宮井浩典（小樽潮陵高等学校）

▲沢をゆく高校生たち

◎専門部から

＜第１回道高体連登山専門委員会＞

日　時　平成１４年５月１０日

場　所　函館中部高等学校

議　題　①平成１４年度北海道登山大会要項の審議

②審査基準の確認

③大会実行委員の決定

④安全対策委員会の規約審議

⑤その他報告

※翌日に千軒岳を会場に技術交流会を実施

＜第２回道高体連登山専門委員会＞

日　時　平成１４年６月２５日

場　所　美唄工業高等学校

議　題　①平成１４年度北海道登山大会の確認

②審査基準の再確認

③審査員打合せ

＜第３回道高体連登山専門委員会＞

日時　平成１５年２月（予定）

高知国体から、少年の部にスポーツクライミングが正式種目として認められ、本道からも高校生が参加しました。また、ジュニアオリンピックカップ大会やアジアユース大会予選など全国規模の大会も開催されています。道内でも高校生の参加できるクライミングコンペが年４回実施されており、それぞれの大会に20～80名位が参加しています。これらの動きに対応して登山専門部も一昨年から研修会を行って指導者の育成、選手強化を図っています。今年度も１１月９・１０日に美唄工業高等学校体育館のクライミングボードを使って顧問、生徒の研修会を行いました。

安全対策委員会規約

北海道高等学校登山専門部

第１章　総　則

第１条　この規約は、北海道高等学校登山専門部が行う登山大会の安全対策に関して、必要事項を定めることを目的とする。

第２条　この委員会は、登山経験豊かな地域山岳連盟役員、及び登山専門部役員と当番校代表者がこれを構成する。

第２章　役員と任務

第３条　本会に次の役員を置く。

１．委員長（１名）

２．副委員長（１名）

３．安全対策委員（若干名）

第４条　役員の任務は次の通りである。

１．委員長は本会を代表し、安全対策委員会の業務を統轄運営し、決定事項を審査委員長に伝え、登山大会の安全に寄与する。

２．副委員長は委員長を補佐し、委員長と共に登山大会の安全に寄与する。

３．安全対策委員は登山大会コースを熟知し、大会が安全に行えるよう審査委員長に意見を具申する。

第３章　会　議

第５条　安全対策委員会は大会初日に行い、安全対策及び荒天対策について協議する。

第６条　天候の急変など事故が予想されるときは臨時委員会を開催し、審査委員長に意見を伝える。

第４章　任　期

第７条　安全対策委員会の任期は、大会のために委嘱された日から大会最終日までとする。

第５章　会　計

第８条　委嘱した安全対策委員会の必要経費は、北海道高等学校登山専門部及び当番校が負担する。

この規約は平成１４年６月２５日から施行する。

来年度より２年間、函館ラ・サール高等学校が事務局を担当しますので、よろしくお願い致します。

専門部副部長兼専門委員長　中森　司

第42回北海道高等学校登山選手権大会兼第47回全国高等学校登山選手権大会北海道予選会

期　日　2003年６月25日㈬～27日㈮
場　所　知床硫黄山・羅臼岳
当番校　北見北斗高等学校
協力校　遠軽高等学校・北見仁頃高等学校
　　北見柏陽高等学校
参加校　男子15校・女子10校
成　績　男子　１位　北見北斗高等学校
　　２位　札幌南高等学校
　　３位　札幌工業高等学校
　　女子　１位　札幌南高等学校
　　２位　旭川東高等学校
　　３位　八雲高等学校

第42回を迎えた今年の登山大会は、知床国立公園内の知床硫黄山と羅臼岳を会場に行われた。特別保護地区でもあり、研究テーマは「登山マナーと自然保護」として、登山のマナー、自然保護の基本的な考え方を実践の中で身につけてもらった。また、携帯トイレの配布も行い今後の登山にも使用するよう啓蒙した。

知床硫黄山の登りでは、濃いガスと強風に自然の厳しさを実感させられ、頂上直下の岩場では落石の危険もあり、各隊ごとに慎重な行動が要求された。頂上から見えるはずの国後、択捉島は濃いガスの中、全く姿を見せなかったのは残念だった。

翌日の羅臼岳登山は、男子隊が羅臼側から、女子隊が岩尾別側から登る集中登山を行った。この日も、1000mを越えるあたりからガス、風、小雨と厳しい条件となってきたが、日頃からのトレーニングをよく行っているチームが多く、それぞれ目的を達成できた。

登山大会では、体力的な面、技術的な面、基礎知識の面の３点を審査しているが、体力的に優れているチームがゆとりを持って行動できるので、技術的にもその他の面でも力を出すことが出来る。今回の大会で、体力的に優れていると評価されたのは、男子では札工、八雲、札南、北見北斗、女子では札南、北見北斗、旭川東の各校で日頃からよく訓練されていて雪渓の登下降、岩場での下降技術等にも力が出ていた。設営技術で高得点を得たのは、男子北見北斗、女子旭川東校で訓練された早さだけでなく、完成度の素晴らしさが評価された。天気図審査ではかなり難しい天気図であったため、練習量の多い少ないが結果に表れ、点数の開きが大きかった。その中で男子、小樽潮陵、女子、旭川東校が最高点をとった。行動テストは山域研究、植生、自然観察等事前の調査が点数を左右するもので、点数差が大きく開き、北海道の東端での大会であったため事前山行の出来たチームが高得点を得た。男子では北見北斗が満点、女子は札南が最高点であった。ペーパーテストは登山する山域、コースの概念、登山の基礎的な知識などが求められ、高校に入って初めて本格的な登山をする生徒が多い中ではしっかりと学習しておかなければならない大切な項目である。今回は男女とも旭川東校が最高点を獲得し、日頃からの努力が結果に表れていた。

審査委員会ではその他にも細かな点で多くの指摘がなされているが、講評のときお話しいたしましたので参考にして頂き、より快適な、楽しい登山が出来るよう研鑽を積んでもらえればこのような大会登山の意義も大きなものになると確信いたします。

奥深い山の神秘、楽しみに足を踏み入れた高校生が、その後においても、事故のない登山を楽しんでもらうために、しっかりした考え方、基礎的な知識、実践を身に付けて貰うことが一番大切なことでしょう。

（文責　審査委員長　奈良　憲司）
美唄工業高校

優勝の喜び〈登山　男子〉

北見北斗高等学校

閉会式が始まった。まだ心の準備もできぬまま、すぐに成績発表に入った。桐尾先生がマイクの前に立ち、紙を読み上げる。

「成績発表、男子、最優秀校……。」

僕は目を閉じて、頭の中で『北見北斗、北見北斗来い！』と叫んでいた。

――2年前、先輩達が惜しくも全国へ行けなかった時、僕達が全国へ行って仇をとると約束した。部員達からも応援され、絶対に優勝と言った。その他にもたくさんの人々に応援され、期待された。皆のために、そして何よりも自分のためにどうしても優勝したかった。――

「成績発表、男子、最優秀校、北見北斗高等学校！」

『来た！』背中に電流が走った。後ろで見ていた部員達の喜びの声が聞こえた。遂に優勝した。壇上で賞状を手にした時、その手が震えた。聞いた話だが、その時桐尾先生は目頭を押さえて会場から出ていったそうだ。先生、泣きましたね。

その後、皆に祝福されるうちに、僕は本当に良い仲間に恵まれていると強く感じた。この優勝は僕達を支えてくれた全ての人のものだと思う。

「みんな、ありがとう！」

帰りに皆で蕎麦屋に寄った。今までで一番美味い蕎麦だった。

（主将　大島　健吾）

優勝の喜び〈登山　女子〉

札幌南高等学校

全道大会の閉会式で、結果が発表されたとき、これで引退がのびてまた山に登れるのだと思うとうれしかった。まさか自分たちの学校の名前が呼ばれるとは思っていなかったので、最初は、夢の中にいるような感じがして、賞状やトロフィーを受けとる時は、足が浮いているようだった。今回のメンバーは、3年が2人と、2年、1年が各1人で、そのうち大会経験者が2人という即席のチームだった。そんな中で、ここまでこれたというのは、1・2年の頑張りが大きかったと思う。

私の学校の山岳部は、毎日全員で集まって、トレーニングするわけではないので、あまり拘束されることもなく、自由な感じの部です。ただ、幸運なことに、藻岩山が近くにあったので、大会が近づくにつれ、みんな熱心に通った。ここで培われた体力・精神力は、山だけでなく、これからの人生に活きてくると確信している。(これは先輩達にうけうりですが)

今回、下見の山行が時間の都合で出来ず、予備知識は机上登山だけだった。それでも思ったより落ち着いて望めたのは、ガイドブックを片手に、みっちり行ったミーティングの結果だと思う。

全国大会は、ちょうど大型台風の影響で、予定通りに進まなかったり、天候不良のため、メインの普賢岳にも登れなくて残念だった。結果は26位だったが貴重な体験ができてよかった。

（主将　竹内　優美）

第43回北海道高等学校登山選手権大会兼
第47回全国高等学校登山大会北海道予選会

期　日　2004年６月23日(水)～25日(金)
当番校　帯広農業高等学校
協力校　帯広柏葉高等学校・帯広緑陽高等学校
　　帯広大谷高等学校・帯広北高等学校
参加校　男子12校　12パーティー
　　女子11校　10パーティー（合同１）
成　績　男子　最優秀　江別高等学校
　　優　秀　北見北斗高等学校
　　優　秀　札幌南高等学校
　　女子　最優秀　北見北斗高等学校
　　優　秀　江別高等学校
　　優　秀　八雲高等学校

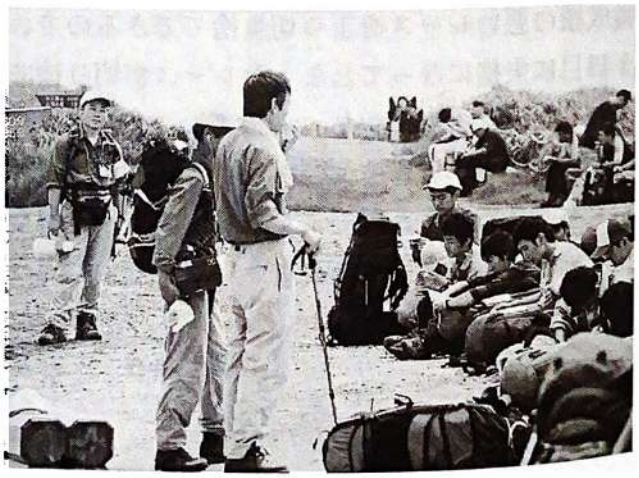
今年の全道登山大会は日高山脈北部の十勝幌尻岳・伏美岳を会場に行われた。これらの山は十勝側からの数少ない登山道が整備された山であり、天候が良ければ、100km以上も連なる日高山脈の展望台として絶好の位置にある。

第１日目は標高1864mの十勝幌尻岳。台風崩れの低気圧も抜けて台風一過の晴天が期待されたが、登山口へ向かうバスから見る日高の稜線はガスに包まれていた。コースは沢づたいの道から、尾根に上がり山頂まで一気に急登する。体力に不安のあるパーティーには厳しいコースであった。また、霧雨に濡れた登山道は滑りやすく特に下りの歩行技術が要求された。

第２日目は伏美岳（1792m）からピパイロ岳（1916.5m）へ向かうコースが予定されていた。順調に行動しても10時間以上の行動時間が予想され、特に女子には難コースである。しかし、前日以上に天候が悪く降り続く雨と、山頂部の強風のため男女ともに登山口から伏美岳山頂往復の行動となった。この日も標高差1000m以上の急登と滑りやすい下りの歩行技術がポイントとなった。残念ながら２日とも山頂からの山脈の展望が無く非常に残念であった。

今回の審査で大きく差がついたのは体力・歩行である。よく鍛えられ、山を歩いているパーティーと不十分なパーティーの差が大きく、隊から大きく離れたり、リタイアするパーティーがあったのは残念だ。登山の基本はあくまでも体力だ。十分鍛え、体調を整えて大会に臨んで欲しい。装備に関しては各校とも全体によく準備されていた。設営はよく訓練されたパーティーが多かった。どのような条件でも、素早く・確実な設営ができるように訓練を積んで欲しい。天気図は比較的描きやすく、放送アナウンスも聞き取りやすかった。半数ほどはよく描けていたが、残りは練習が不十分である。来年は全国大会に準じて、用紙が第１号、等圧線が４hPa毎となり、描きやすくなるので練習して欲しい。記録・計画は雨の中濡れないように工夫して的確な記録を取ったところが高得点であった。行動テスト・ペーパーテストは事前の研究がしっかりなされていた高得点のパーティーと不十分なパーティーの差が大きかった。特に男子は、読図で大きく差が開いた。普段の山行から地図を読む訓練が大切だ。炊事では高温の夏場であるため「なまもの」の加工に工夫が見られた。

今回は男子は入賞した３校と函館ラサールの上位４校、女子は入賞した３校がすべての面で高得



点を取り、他のパーティーとの差が大きかった。
様々な山を数多く歩くことによって、山を歩く体力・技術・知識を身につけ、将来にわたって楽しく安全な登山を楽しんで欲しい。

（文責　審査委員長　桐尾　義之）

◎専門部より

2004年度の活動についてご報告致します。合同チームの全道大会初参加など若干の変更がありました。

＜第１回道高体連登山専門委員会＞

日時　平成16年５月７日㈮

● 主要議題

１）各支部専門委員及び事務局の確認

専門部長がフェルミン・マルチネスに変更となりました。今年度全道大会当番校である帯広農業高校　菅野先生には部長指名で専門委員に入って頂き、当番支部２名体制としました。また（全国）常任委員を引き続き函館中部高校　中森先生にお願い致しました。

２）加盟校の確認、地区大会の開催状況について

加盟校が１校減となり、43校９支部体制となっています。２支部（小樽・北見）において、加盟校数及び活動状況の理由により地区大会が開催できない状況が生じております。今後更に減少していくことが予想される中で、何らかの対策が必要と思われます。

３）平成16年度全道高校登山大会について

① 実施要項確認

② 審査員決定・審査基準確認

支部専門委員が中心となって審査を実施しております。旅費の支出につきまして各学校のご配慮をお願い申し上げます。

③ 荒天対策、安全対策の確認

安全対策として引き続き道岳連（北海道山岳連盟）に協力を要請致しております。

④ その他（合同チームの全道大会初参加）

初めての事例となりましたが、合同チームが全道大会に参加することとなりました。専門委員会後に具体的な動きがあり、登別高校と静内高校が室蘭女子として、所定の手続きを経て正式の参加となりました。今後合同チーム参加がスムーズにできるよう事務局も動く予定です。

４）2005年度全道大会（案）の確認及び全道大会当番支部、当番校の確認

2006年度以降で当番校が確定していない大会があり、今後調整または検討が必要な状況です。

＜第２回道高体連登山専門委員会＞

日時　平成16年６月22日㈫

● 主要議題

平成16年度全道高校登山大会について

① 遅れたチームへの対応

② 審査方法

③ 荒天時対策・救護・通信体制

④ コース状況　など

最優秀校　男子　江別高校、女子　北見北斗高校が全国大会に進みました。全国大会ではそれぞれ37位、30位の成績に終りました。詳しくは、全国大会報告（抜粋）をご覧下さい。

第48回全国高等学校登山大会報告

北海道地区常任委員　中森　司（函館中部高校）

大会は８月２日～６日、島根県三瓶・琴引・大万木山域を会場に開催されました。今回も前回長崎大会と同様、台風の影響を受けました。開会後医療知識・天気図・自然観察のテストを実施、その後幕営地に移動して、設営・炊事・装備審査がありました。２日目、３日目は10キロ以上の荷物を担いでの縦走で、30度前後の山中を８時間以上歩くものでしたが、熱中症対策は十分に行われていました。

＜第３回道高体連登山専門委員会＞

日時　平成17年２月（予定）

● 主要議題

① 全道大会反省

② 全国大会、常任委員会報告

③ 平成17年度全道大会（案）審議　他

２年間事務局を務めさせて頂きました。至らぬ点が多く反省することばかりです。微力ながら登山専門部の活動に寄与でき、今までの恩返しが少しでも出来たことはうれしい限りです。来年度からは旭川支部に事務局が移ります。旭川南高校望月　真先生にバトンタッチ致します。どうぞよろしくお願い致します。

（登山専門委員長
函館ラ・サール高校　川村　和男）

第44回北海道高等学校登山選手権大会兼
第49回全国高等学校登山大会北海道予選会

期　日　2005年６月22日(水)～24日(金)
当番校　札幌南高等学校
協力校　札幌工業高等学校
　　札幌地区高等学校山岳連盟
参加校　男子12校
　　女子５校
成　績　男子　最優秀　札幌南高等学校
　　優　秀　江別高等学校
　　優　秀　八雲高等学校
　　女子　最優秀　八雲高等学校
　　優　秀　北見北斗高等学校
　　優　秀　江別高等学校

今年の全道大会は札幌郊外の無意根山と後志の羊蹄山で行われた。無意根山は定山渓温泉の奥の山で、札幌近郊の山として多くの人に親しまれている。

第１日目は無意根山で、数日間、気圧配置に大きな変化がなく、好天が続くと予想される中での登山であった。気温・湿度ともに高く、きつい登山になるかと思われたが、標高900ｍ程度でカンカン照りではなかったため比較的楽に登ることができた。下りでは途中の急斜面で全員が下りきるまでに若干の時間がかかったが、丁度良い休息になったようである。無意根尻小屋までの間は雪渓がかなり残っており、涼しく快適な下りだったが、宝来小屋から薄別までの林道はやや消耗する歩きであった。

第２日目は羊蹄山で、１日目登山終了後のキャンプ地から見上げる山頂ははるかに高く、いささか登る気力が萎える思いであった。

５時過ぎ、登山開始、前日の疲れを感じさせないペースで順調に登る。早朝で気温も比較的低く、また陽射しが樹冠に遮られる所が多く、思ったよりも楽で、６合目を過ぎたあたりから山頂にかけてはガスに覆われており、視界はきかないものの涼しく快適であった。外輪山に着いた時点では視界数十ｍで、展望は時々一部しかきかない状態であったが、男女とも予定通り山頂を経由して比羅夫コースへと向かった。

上りの途中８合目付近で、男子隊顧問隊の通過中に畳を立方体にした位（目撃者談）の大落石があり、もし選手達の隊列が通過中であれば無事では済まなかったのではと思われた。全員無事下山できたのは何よりであった。

今回の審査で最も大きく差がついたのは、「体力」と「歩行」である。今大会では女子１パーティが離脱したのみで、他の全パーティが予定通りのコースを踏破したことは評価できるが、男子でかなり遅れたパーティもあり、日常の練習量の差が

はっきりと出る結果となっている。

「歩行」では羊蹄山の下りで若干の転倒が見られた。急斜面での歩き方、バランスの取り方は経験によって体得すべき課題である。

装備については、全体に良く準備されており、設営についてもほとんどのパーティは手際よくできた。

「天気図」は大会までの数日間、安定した状態が続いており、大きな変化がなかったにもかかわらず、適確な予報を出せないパーティが多かった。天気図の読み方にはまだまだ経験を重ねることが必要である。

「行動テスト」・「ペーパーテスト」では、事前準備を重ねてきたパーティと準備不足のパーティの差がはっきりと出ていた。

「マナー」では大きな差はないが、隊列の行動開始時に準備ができていないパーティが少数ながら見られた。全体中の一員ということをしっかり認識して行動するが必要である。

今回、男女とも上位パーティはすべての面で高得点となっている。多くの山を経験することにより山登りを楽しみながら体力・技術・知識を向上させる努力を期待する。

（文責　審査委員長　菅野　　薫）

◎専門部より

2005年度の活動についてご報告いたします。

＜第１回道高体連登山専門委員会＞

日時　平成17年５月13日㈮

●主要議題

１）各支部専門委員及び事務局の確認

専門部が函館支部から旭川支部へ移動し、専門部長は旭川南高校　会田悟校長となりました。専門委員長兼全国常任委員は２年間、私　望月真が務めます。

２）加盟校確認、地区大会開催状況について

９支部41校で今年度はスタートです。各支部とも部員減少が悩みの種であり、特に女子部員の確保は深刻な問題です。そんな中、旭川支部では秋季大会より上川高校が10人以上の部員数で加盟する予定です。

３）平成17年度全道登山大会について

・コースの確認…今年は残雪が多く、何カ所かの危険な箇所あり。
・天気図用紙を全国大会に習い「１号用紙」に変更
・荒天対策、安全対策委員会の設置…道岳連の協力要請
・審査員決定・役割分担…出場校の減少、旅費支給についての問題等で、スタッフ不足。

４）平成18年度以降全道登山大会について

20年度以降の当番校が未定であり、今後の調整、検討が必要です。

５）日本山岳共済に高校生対象の保険できる。

６）道岳連からクライミング大会の「後援」依頼があった件についての報告。

＜第２回道高体連登山専門委員会＞

日時　平成17年６月21日㈫

●主要議題

平成17年度全道登山大会について

・審査員の割り振り
・遅れたチームへの対応
・審査方法確認…細部、審査分担等の確認
・ペーパーテスト問題・正答の確認
・安全対策・救護・通信体制について
・大会コースについて（特に残雪の状況）

第49回全国高等学校登山大会報告

８月７日㈰から11日㈭までの５日間、千葉県君津市を本拠地として高宕山コース、三郡山コース、元清澄山コースの３コースを会場に行われた。房総丘陵は最高地点が403ｍで気温・湿度、おまけにヤマビルで脅かされて、かなり心してでかけた。幸い曇天日多く、稜線上は風が涼しく結構耐えられた。標高が低い割には深い峡谷が多く景色は最高であったのも嬉しい。北海道の代表３パーティは、汗まみれながら熱中症に負けることもなく頑

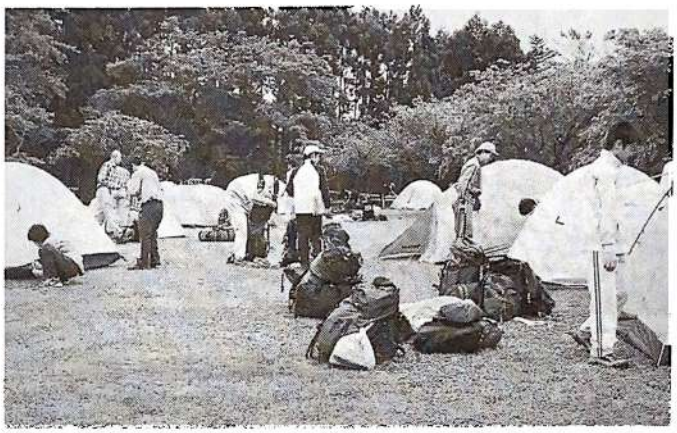
第45回北海道高等学校登山選手権大会　兼
第50回全国高等学校登山大会北海道予選会

期　日　2006年６月21日(水)～23日(金)
当番校　函館ラ・サール高等学校
協力校　函館中部高等学校、函館東高等学校
　　遺愛女子高等学校、八雲高等学校
　　函館地区高等学校山岳連盟
参加校　男子13校　　女子５校
　　（うち１校は札幌稲西高校と藻岩高校の混成チーム）

成　績　男子　最優秀　札幌南高等学校
　　優　秀　北見北斗高等学校
　　優　秀　札幌北高等学校
　　女子　最優秀　八雲高等学校
　　優　秀　北見北斗高等学校
　　優　秀　根室高等学校

今年度の北海道大会は、地元山岳会（熊石山歩会）が苦労して登山道を開いた歴史のある白水岳と、どっしりとした道南の名峰狩場山を舞台として開催された。いずれの山も道央以北の高校生には珍しいブナの林を抜けていく道南らしいコースである。しかし、特に狩場山は往復20㎞（男子）に及ぶ長大な茂津多コースで、大会は体力勝負となると予想された。

第１日目の白水岳（平田内温泉コース）は早朝からシトシトと雨が降る状況。やや機先をそがれるが、雨具姿で予定通り出発。降り続く雨に途中白泉岳で、その先の尾根を進むか否か行動隊長を中心に審議されるが、本部から雷の心配なしという報告を受け、続行。時折激しさを増す雨の中、男女とも予定通り白水岳山頂を踏む。下山は、泥々となって滑りやすい状況であり、日頃山慣れしているチームとそうでないチームの歩行技術に差がついた。下山後、バスでキャンプ地北檜山自然休養林へ。ここで設営・炊事審査を行ったが、ここ



でもまた時折小雨がパラつく。一日中雨に祟られた天気ではあったが、選手の表情が明るいことと当番校の心遣いがせめてもの救いであった。

第２日目は当初の予定通り、茂津多コースを男子は狩場山頂まで往復。女子は手前の前山までの往復として出発。前日同様時折小雨がパラつく生憎の天候であったが、前日ほどのひどい降雨はなく、国体でも使用された幅の広い登山道も前日に比べれば格段に歩きやすい。ところが選手は、前日の雨中行動の疲れが出たのか、はたまた濡れた物の多い状況下でのテント泊では十分に回復しなかったのか、体調不良を訴えて隊離脱・リタイア下山するチームが男子を中心に相次いだ。結局、隊を離れずについてこれたチームは男子13チーム中６チーム、女子５チーム中２チームであった（ただし女子については４チームが予定の前山山頂を踏み、全行程を消化した）。こうした状況下、男子についてはいかんせん隊全体のスピードがあがらず、時間切れで女子同様前山までで下山せざるをえなかった。

結局のところ今大会はテント泊を含め丸２日間の体調をいかに整えられたかという意味での総合的な体力が顕著に成績結果に反映した。その他の審査項目で、必要装備の所持・ポイントを押さえた設営・食料の腐敗対策・記録書の必要事項記載等については概ねどのチームも差がないレベルにあった。

前泊もテント泊であったことによって、翌朝サブザックにヘッドランプを入れ忘れたり、体調を崩したメンバーの歩く順番を臨機応変に変えるというパーティシップに欠けていたりといったことが審査員から指摘されたが、これもまた総合的な登山能力が問われる大会であったことを意味したと思われる。

今後とも、大会のみならず日頃の山行をより多く重ね、楽しみながら総合力を培ってくれることを願う。　（文責　審査委員長　小笠原　浩）

◎専門部より

2006年度の活動についてご報告いたします。

＜第１回道高体連登山専門委員会＞

日時　平成18年５月12日㈮

●主要議題

１）各支部専門委員及び事務局の確認

専門部は旭川南高校が２年目で担当します。専門部長は会田悟校長、専門委員長兼全国常任委員は望月真です。支部専門委員が数名変更しました。

２）加盟校確認、地区大会開催状況について

今年度は９支部42校です。各支部とも部員減少が悩みの種であり、特に女子部員の確保は深刻な問題です。そんな中、旭川支部７校はパーティの組めないのは１校のみ、３パーティも参加するすごい学校もあります。

３）平成19年度全道登山大会について

・３泊ともテント泊とする。食事関係は色々検討中。

・コースの確認…白水岳、狩場山と長いコースになるので、女子の２日目は狩場山手前、前山までの往復とする。

・審査員決定・役割分担…出場校の減少、旅費支給についての問題等で、スタッフ不足。

４）「審査の手引き」を作成。

５）「障害者補償制度」での大会時の提出書類について

＜第２回道高体連登山専門委員会＞

日時　平成18年６月20日㈫

●主要議題

平成18年度全道登山大会について

・審査員の割り振り，審査分担等の確認

・審査方法確認…細部、遅れたチームへの対応等

・ペーパーテスト問題・正答の確認

・大会コースについて、安全対策・救護・通信体制について

第50回全国高等学校登山大会報告

８月21日㈪から25日㈮までの５日間、奈良県の大台、奥駈、大峯の３コースを会場に行われた。世界遺産に指定され、1300年以上の歴史を誇る修験僧の足跡を訪ねる今回の大会はあまりにも強烈、贅沢の一言に尽きる。大台ヶ原の世界一雨量が多く苔むした特異な自然、大普賢岳の鎖、階段の連続の荒々しい山岳地形、目を見張るすばらしい山々の連続だった。天候にめぐまれ、しかも予想に反しての涼しい登山であり、道代表の札南男子、八雲女子の２チームは元気いっぱいに歩いていた。こんな幸せな体験ができる高校生を北海道から今後もどんどん送り出したいものだと、つくずく感じた次第である。道代表の両校には、壮大な大会参加経験の自信を、道内の仲間達にしっかりと伝えてもらいたいと願う。

なお、今回は50回の記念大会であり、閉会式の後、希望有志で記念祝賀会を盛大に挙行した。北海道からは私と、道岳連副会長（全国副部長や審査委員長の経歴あり）小野倫夫氏、前全国副部長種市敏則氏の３名で参加してきた。

＜第３回道高体連登山専門委員会＞

日時　平成19年２月２日㈮ … 予定

（文責　登山専門委員長　望月　　真）

第46回北海道高等学校登山選手権大会兼
第51回全国高等学校登山大会北海道予選会

期　日　2007年６月20日(水)～22日(金)
当番校　北海道静内高等学校
参加校　男子13校　女子４校
成　績　男子　最優秀　札幌南高等学校
　　優　秀　北見北斗高等学校
　　優　秀　旭川東高等学校
　　女子　最優秀　北見北斗高等学校
　　優　秀　遺愛女子高等学校

今年の北海道大会は北日高のペンケヌーシ岳とチロロ岳で行われた。日高の山では登山道のある所は少なく沢登りが主である。足元の不安定な沢筋をどのようにして登るかが大会の要である。

第１日目のペンケヌーシ岳へは、パンケヌーシ川六の沢出合いから始まる。天気は、朝方曇っていたが徐々に晴れてきた。朝一番の林道歩きとあって皆ピッチが早い。途中1097m地点の大きな滝を仰ぎ見ることもでき景観は心地よい。林道終点から沢靴に履き替え西に伸びる沢を登る。高度をぐんぐん稼げるのは沢の醍醐味である。この沢は水流も少なく滑りやすい泥つきもあるので、バランスを崩さないよう注意が必要である。初めて沢登りをする生徒もいて戸惑う者もいたが日頃の登山でバランス感覚を磨いている生徒にとっては容易な沢であった。その沢も45分程度と短時間で終了し林道にぶつかる。その後登山靴に履き替え稜線めがけて登行する。稜線直下で雪渓が出てくるが、サポート隊によるザイルフィックスがあって助かる。こういう所では下りは慎重にしたい。稜線に出ると周囲の景観もパッと開け、雪もなく軽快に歩ける。林道終点から２時間弱、頂上に到着。男子、女子共に体調はすこぶる良く、頂上からの景観を堪能する。すぐ近くに芽室、背後には翌日登るチロロがあり、その向こうに、ピパイロやトッタベツの主稜が続く。更に、夕張、芦別、十勝、大雪と360度のパノラマを満喫できた。

２日目は朝早く５時に出発し、チロロ岳登山口の曲がり沢出合いから歩き始めた。標高850mの地点から沢に入る。気温18℃で曇り。前日の沢と違って水量も多く、所々で滝を捲くなど高度感のある所も多い。下二股手前で無線により男子が女子より30分ほど先行していることがわかる。上二股から雪渓が現れ、登山靴に履き替える。二の沢乗越しまでは結構急な雪の詰まった小沢を進む。二の沢も雪で埋まっている。天気は曇りで上部は薄くガスがかかっている。時折コルからチロロへのスカイラインが見え隠れする。女子隊は男子隊がその稜線上を往復するのを見ながら急な二の沢の雪渓を登行するが、惜しくも時間切れとなりコル手前で引き返した。下山路では雪渓が緩んで口

を空け注意を要したが、晴れ間も広がり、雪の下から芽を出して間もない黄色に染まるミヤマリュウキンカに終始目を奪われた。雪解けでまだ冷たいであろう沢水に足を浸してパシャパシャ水しぶきを浴びせながら下山するパーティーもみられる。2日間の沢歩きでだいぶ沢靴に慣れたらしい。この日は行程も長く、男女とも体力差がみられた。けれども2日間を日高の山々に浸った選手たちの心は自信と感激で満ち溢れていたのは間違いない。

下山後は当番校の計らいで大交流会が行われた。前日は幕営や食事の審査で緊張していた選手達も今宵はリラックスした模様だった。同じ苦労を分かち合った者同士が語り合う姿はなんとも和やかである。

本大会は沢登りに慣れていない生徒にとっては大変だったかと思う。けれどもそうした新しい登山スタイルにも日頃の山行でのテキパキとした行動や周囲への注意力が生かされる。今後も自然を満喫しつつ積極的に登山を続けてほしい。来年度は今年以上の参加校の増加をも期待したい。

（文責　審査委員長　常田　貞彦）

◎専門部より

2007年度の活動について報告いたします。

1．第1回高体連登山専門委員会

日　時　平成19年5月11日㈮

主要議題

1）各支部専門委員及び事務局の確認

専門部は旭川東高等学校が今年より担当します。専門部長は富樫一憲校長、専門委員長兼全国常任委員は水野憲雄です。支部専門委員が数名変更しました。

2）加盟校確認、地区大会開催状況について

今年度は9支部41校です。一部支部では部員不足でチームを組むことが出来ず地区大会を実施できない状況もあり、部員確保が大きな課題です。

3）第46回全道登山大会等について

・会場はペンケヌーシ岳及びチロロ岳
・審査員、役割分担の決定
・審査基準確認

2．第2回高体連登山専門委員会

日　時　平成19年6月19日㈫

主要課題

平成19年度全道登山大会について

1）役員役割分担確認
2）審査方法確認
3）ペーパーテスト問題・解答の確認
4）大会コースの安全・救護・通信等について

3．第3回高体連登山専門委員会

日　時　平成20年2月上旬に予定

（文責　登山専門委員長　水野　憲雄）

第51回全国高等学校登山大会報告

8月16日㈭から20日㈪までの5日間佐賀県の九千部山・蛤岳山系、脊振山・三瀬峠山系、浮岳・十坊山山系の3コースを会場に行われた。16日は日本最高気温更新（40.9℃）日で、九州でも35℃をはるかに超え、全装からサブへ、更に熱中症に備え短縮ルートがとられる猛暑の中、ブナの樹林帯から時折玄海難を望みつつ、ひたすら暑さに耐える登山となった。その日の行動中にはリタイヤーも続出する一方、男子A隊札幌南、女子B隊北見北斗、男子C隊北見北斗の各校は、みごと健脚を披露してくれた。

（文責　登山専門副委員長　川名　典道）

女子B隊（北見北斗高校）〈椎葉峠直下で〉

第47回北海道高等学校登山選手権大会兼
第52回全国高等学校登山大会北海道予選会

期　日　2008年６月24日(火)～27日(金)
当番校　北海道旭川東高等学校
参加校　男子13校　女子３校
成　績　男子　最優秀　旭川東高等学校
　　優　秀　旭川北高等学校
　　優　秀　北見北斗高等学校
　　女子　最優秀　北見北斗高等学校
　　優　秀　遺愛女子高等学校

今年の北海道大会は北海道の屋根にあたる大雪山系で行われた。大会期間中は好天に恵まれ、特に登山行動日にあたる２日間は雲ひとつない快晴となり、選手をはじめとする参加者は最高のコンディションで競技を行うことができた。

１日目は美瑛岳（2,052m）登山である。ベースキャンプ地（旭岳青少年野営場）からバスに約１時間揺られ望岳台登山口に着く。男女それぞれ隊列を編成して出発。途中、高山植物の可憐な姿で疲労を癒し、わずかに残る雪渓で涼をとり、雪解け水の沢で一息いれ、急登の続く尾根を頑張って全員が頂上に到着した。日陰のほとんどない登山コースで太陽に直射され続けるが、真夏とは違い日射病の心配はない。あまりの好天のため、頂上では休憩時間を大幅にオーバーしたが、下山も快調に歩を進め全員元気に登山口に到着した。野営場着後はテント設営、炊事、そして他校と交流を深めあうが、明早朝の登山行動に備え、早めの就寝となった。

２日目は旭岳（2,291m）登山、北海道最高峰の山である。コース前半はロープウェイを使わず、標高差1,200mを一気に登り切る体力勝負である。しかもその後半には北海道第２の高峰、北鎮岳（2,244m）への登り返しが待っており、コース全長は約18kmと長丁場である。野営場出発後、登山口ロープウェイ駅を横目で見ながら足をひたすら上へ上へと進める。前日の疲労が残っていたためか、男女各１チームが残念ながら途中リタイヤしたものの、他チームは元気に頂上を目指した。旭岳頂上は微風快晴、360度の視界を遮るものはなし。かすんではいたが遠くには利尻山まで見ることができ、素晴らしい眺めに生徒は感動の声をあげていた。１年間を通してもこれほど眺望が効く登山日和は稀と思われる。コース後半は北鎮岳からの一気の下りである。中岳温泉（天然露天温泉風呂）の横を通り、昨日登った美瑛岳をはるか遠くに見ながら、一路ロープウェイ駅へと向かう。予定の行動であるが下山はロープウェイを利用し、野営場着後２日間の汗を流す温泉入浴へと向かった。

審査に関しては、上位を窺うチームは体力歩行・

ペーパーテストに向けての学習・コースの事前調査が万全であり、大会本番を意識した豊富な練習量と日常の研究の深さが他チームとの得点差に現れていたようである。他方、設営撤収・装備・気象・計画記録・マナー・炊事等の審査項目については概ねどのチームも良く準備されており、チーム間の差は目立たなかった。

今後の高校登山活動については、大自然を相手にした状況の変化に臨機応変な対応が出来る知識と経験を習得し、メンバーシップと登山マナーを大切にし、多くの山を安全に楽しく登山することを目標に、もっと多くの高校生に登山に接する機会をもって欲しいと願う。とくに女子については各高校に数人の部員はいるがチームの成立が難しく、1校で4人揃うと即全道大会出場という現状である。北海道として女子チームが存続できるように部員の加入増加を呼びかけたい。

◎専門部より

2008年度の活動について報告します。

1．第1回登山専門委員会

平成20年5月9日㈮　旭川東高校

議題

① 各支部専門委員及び事務局確認

全国常任委員、各支部専門委員、平成21年度以降の事務局

② 各支部体制

加盟校、顧問氏名確認

③ 全道登山大会について

大会要項確認、審査員・役割分担決定、審査基準確認、等

④ 全国登山大会について

日程、会場、出場校数、等

⑤ 次年度以降の全道登山大会開催支部・当番校について

⑥ 道岳連関係事項について

2．第2回登山専門委員会

平成20年6月24日㈫　旭岳温泉

議題：全道登山大会について

① 役員役割分担

② 審査内容

③ ペーパーテスト

④ コース状況

⑤ 荒天時対策

⑥ 救護

⑦ 通信体制　　等の確認

3．第3回登山専門委員会

平成21年2月6日㈫　に予定

◎第52回全国高等学校登山大会報告

8月6日㈬から10日㈰までの5日間、埼玉県の白泰山・両神山・白岩山を会場として開催された。とくに両神山は日本100名山の一つに数えられている名山である。期待をして臨んだが、諸般の事情によりコース途中の清滝小屋までの短縮コースとなり残念であった。しかし3コースはそれぞれに古い歴史をもっており、秩父の山々の良さを感じながら楽しく歩くことができた。3日間の登山行動日は好天に恵まれ、さらに埼玉県という地理条件から暑さによる影響を心配したが、ほぼ全コースが高い樹林帯の中にあり直射日光を受けることはほとんどなかった。反面、幕営地グランドの地温が高く、夜になってもテント内の温度が下がらず、結局3日間ともに熟睡できないという予想もしない苦痛に見舞われた。北海道からの参加校は例年事前の下見登山をできない状況にあるが（本州の半数以上の高校は下見登山を実施しており特に上位入賞を狙う高校は複数回現地入りして大会に備えている）、男子旭川東、女子北見北斗両高校は机上調査を綿密に行って参加した。結果、男子は完歩したが女子は体調不良のため途中リタイヤに終わった。

《文責　登山専門委員長　水野　憲雄》

第48回北海道高等学校登山選手権大会兼
第53回全国高等学校登山大会北海道予選会

期　日　2009年６月23日㈫～26日㈮
当番校　北海道釧路湖陵高等学校
参加校　男子13校　女子９校
成　績　男子　最優秀　旭川東高等学校
　　優　秀　札幌北高等学校
　　優　秀　釧路湖陵高等学校
　　女子　最優秀　旭川東高等学校
　　優　秀　北見北斗高等学校
　　優　秀　北星学園女子高等学校

今年の北海道大会は、釧路湖陵高校が当番校を引き受けてくださった。６年ぶりに道東の山を会場として行われることとなった。釧路湖陵高校が当番校を担当するのは平成12年以来である。

開会式当日の朝は、前夜来からの大風と雨が止まずに続き、大会運営に影響があるのではと、心配する状態であった。しかし参加校が集結し、午後からの開会式及び講演とペーパーテストを終えた時点で、空は雲ひとつない快晴に変わった。台風程の低気圧ではなかったが、まさに台風一過を思わせる天候であった。大会成功に向けての、当番校の周到な準備と意気込みに報いるような天候となった。その後、各パーティー１名の担当による天気図作成を実施した。今年は大会運営の関係で、大会期間中３泊すべてが幕営となった。前泊（開会式当日）は清里町オートキャンプ場で、手入れが大変行き届いた幕営地であった。生徒・顧問ともに、とても気持ちよくテント設営できた。

１日目は斜里岳（1,547m）登山である。天候は晴れ。キャンプ場からバスで登山口に向かった。予定通り６時に、男子・女子の順でそれぞれ隊を編成し、山小屋である「清岳荘」前登山口を出発した。コース前半は沢歩きである。登山道としては変化に富んでおり、生徒の歩行技術に差が出るコースである。それでも各パーティーは順調に、右へ左へと渡渉を繰り返した。途中、岩や丸木橋を踏み外して靴の中を濡らす生徒も出た。しかし、大きな怪我もなく全員元気に歩を進めた。高度を上げていくと、例年より雪解けが遅いため雪渓が多い。そのために途中、ザイルを張る個所もあり、慎重にトラバースを繰り返した。コース後半は、沢を終えて雪渓とガレ場の登りである。残念ながら、体調不良により途中リタイアするパーティーが出た。しかし、他パーティーは疲労を感じながらも全員元気に登頂した。頂上は風が強かったが、遠望が利いた。翌日登る雄阿寒岳、そして知床連山、屈斜路湖、サロマ湖まで見渡せられた。下山は沢を離れて、新道コースの尾根歩きである。途中の急な下りも慎重に歩き、とりあえずの目的地である登山口に戻った。その後、バスで阿寒湖畔野営場に向かった。到着後、テント設営及び炊事の審査が行われた。各パーティーは、練習の成果を十分に発揮することが出来たと思われる。生徒は審査に緊張しながらも、夕食後は明日の登山に備えて早めに就寝した。

２日目は雄阿寒岳（1,370m）登山である。天候は、前日に引き続き雨の心配はない。登山道行程の目安を示す標識「○合目」に戸惑いを感じながらも（標識の間隔が、距離差にしても高度差にしても不自然なのである）、高度をグングンと上げる。今日は沢も水場も無く、昨日とは雰囲気が異なり、樹林帯が多い。しかし、頑張ってそこを抜けると、背後には阿寒湖が見事に広がっていた。雄大な展望と、高山植物で目の保養をする。途中、昨日に引き続き行動中テストや装備点検テストが行われた。そして今日も、頂上からは遠望が利いた。昨日登った斜里岳も、はっきり確認できる。昼食後、下山行動に移った。女子隊の一部に、本隊から大きく遅れるパーティーが出たが、全員無事に下山した。入浴後、恒例になっている参加校

の交流会を実施した。競技（審査）を終え、生徒はリラックスした雰囲気で臨んでいた。他校生と友情を深め、互いの山に対する想いを語り合うなど、大いに楽しんだ。

最終日は閉会式である。上位を目指して準備を重ねてきた各パーティーが注目する中、結果が発表された。歓喜の涙を流すパーティーと、くやし涙を流すパーティーが並列する。厳しい現実を見る場面であった。

今年は、日本100名山中の、２山を登ったことになり、思い出深い大会であった。また、女子パーティーの参加が増えたことは、非常に喜ばしいことである。次年度以降も続いてくれるよう、期待したい。　《文責　審査委員長　水野　憲雄》

◎専門部より

2009年度の活動について報告します。

1．第１回登山専門委員会

平成21年５月８日㈮　帯広柏葉高校

議題

① 各支部専門委員及び事務局確認

今年度より専門部事務局は帯広柏葉高校です。これに伴い、専門部長が佐藤博明、専門委員長が二瓶伸一となりました。

② 各支部体制

各支部で加盟校の減少が続き、全道で９支部39校となりました。しかし来年度には加盟校が増えそうだという、明るい見通しの支部が出てきました。

③ 全道登山大会について

支部専門委員が中心となって、役割分担をしています。審査や安全に大会を運営するためには人員の確保が必要です。審査員・役員等の派遣依頼につきましては、各学校で特段のご配慮をお願いします。

④ その他の議題

・全国登山大会について
・次年度以降の全道登山大会開催支部・当番校について
・道岳連関係事項について

2．第２回登山専門委員会

平成21年６月23日㈫　清里町

議題：全道登山大会について

・コース状況、運営上の留意点
・専門委員の役割分担、審査内容
・ペーパーテスト問題
・通信体制　　等の確認

3．第３回登山専門委員会

平成22年２月５日㈫　に予定

◎第53回全国高等学校登山大会報告

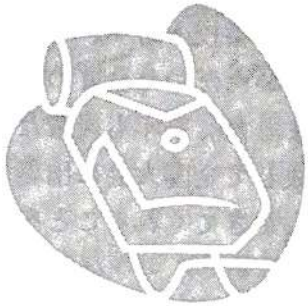
７月31日㈮から８月４日㈫までの５日間、兵庫県の氷ノ山（ひょうのせん）・鉢伏山・蘇武岳を会場として開催されました。大会前は高温多湿の大会になるのではと予想されていましたが、今年の近畿地方は梅雨が明けるのが遅れ、雨の多い大会となりました。

氷ノ山（1,510m）・鉢伏山（1,221m）は、昭和初期に単独行で大きな足跡を残した加藤文太郎ゆかりの山々で、特に氷ノ山は大山に次ぐ中国山地第２の高峰です。選手たちはこの山の美しいブナ林や高層湿原のなかを歩きました。

蘇武岳（1,074m）は、冒険家植村直己ふるさとの山です。美しい阿瀬渓谷を登っていくコースで、途中、大小の滝や金山跡の廃村をたどりながらの山歩きでした。

登山行動３日間のうち、２日間雨にたたられるという悪条件のなか、男子団体旭川東、女子団体旭川東、男子縦走札幌北の選手たちは良く歩きましたが、残念ながら上位にくい込むことはなりませんでした。

《文責　登山専門委員長　二瓶　伸一》



第49回北海道高等学校登山選手権大会兼
第54回全国高等学校登山大会北海道予選会

期　日　2010年６月22日(火)～25日(金)
当番校　北海道札幌稲西高等学校
参加校　男子13校　女子７校
成　績　男子　最優秀　札幌北高等学校
　　優　秀　旭川東高等学校
　　優　秀　札幌南高等学校
　　女子　最優秀　旭川東高等学校
　　優　秀　札幌南高等学校
　　優　秀　北見北斗高等学校

今年の北海道大会は札幌市、定山渓周辺の神威岳・烏帽子岳・札幌岳・空沼岳を会場に行なわれた。登山行動日の２日間は天候に恵まれず、特に２日目は厳しい条件のなかでの登山となった。

大会初日は定山渓温泉ホテル鹿の湯で登山の知識を問うペーパーテスト・天気図審査、講演が行われた。

登山１日目（大会２日目）は、登山口から神威岳（938m）・烏帽子岳（1109m）の往復登山である。定山渓温泉からバスで百松橋の登山口へ移動、そこから隊列を編成して出発。神威岳を経て烏帽子岳山頂を目指した。雨が心配されたが、結局降られることはなく、女子の１校を除いて無事予定のコースを歩ききった。登山終了後、定山渓自然の家キャンプ場へバス移動、設営・炊事の審査を行う。

登山２日目は、男子が札幌岳（1293m）から空沼岳（1249m）への縦走、女子が空沼岳往復である。男子は、途中激しい雨に遭いながらも、長く未整備の箇所も多い縦走路を、１校を除いて歩ききった。女子は激しい雨にたいして、安全を考慮して、万計小屋から引き返した。男女とも、雨の中の登山となったが、選手たちはみなよく歩きよく登った。眺望もほとんどない厳しい登山ではあったが、だからこそ充実感を感じた選手も少なくなかったのではないか。

審査について、ここ数年の傾向であるが、上位チームにはほとんど差はなかった。日頃の豊富な練習量が体力・歩行点に、事前の学習やコース調査・研究がペーパーテストの高得点につながっている。装備・設営撤収・計画記録・マナー・炊事等の審査項目については、上位から下位までどのチームも良く準備されており、その差はあまり目立たなかった。

◎専門部より

2010年度の活動について報告します。

1．第１回登山専門委員会

平成22年５月７日㈮　帯広柏葉高校

議題

① 各支部専門委員及び事務局確認

② 各支部体制

③ 全道登山大会について

④ その他の議題

・全国登山大会について

・次年度以降の全道登山大会開催支部・当番校について

・次年度以降の事務局について

・道岳連関係について

2．第２回登山専門委員会

平成22年６月22日㈫　札幌市

議題：全道登山大会について

・コース状況、運営上の留意点、通信体制

・専門委員の役割分担、審査内容

・ペーパーテスト問題等の確認

3．第３回登山専門委員会

平成23年２月４日㈮に予定

◎第54回全国高等学校登山大会報告

８月６日㈮から10日㈫までの５日間、鹿児島・宮崎両県にまたがる霧島連山を会場として開催されました。大会前は口蹄疫の問題が大きく取り上げられ、その影響が心配されていました。他にも、会場の一部である新燃岳の火山活動が活発になったため、直前になってコースが変更されるなど、大会実行委員会は大変ご苦労されたと思います。その中での大会開催は大変意義あるものでした。

霧島連山は韓国岳（1700m）や高千穂峰（1574m）などからなる火山群です。日本初の国立公園に指定された風光明媚な山域で、坂本龍馬がその妻おりょうと新婚旅行をした場所としても知られています。天候に恵まれればすばらしい眺望が期待されるコースでしたが、残念ながらあいにくの天気が続き、それは次の機会のお楽しみとなりました。男子団体に出場した札幌北高校は大いに健闘し、12位となりました。上位校との差もけっして大きくはなく、今後の北海道代表校に希望をもたらす結果でした。女子団体は２年連続で出場した旭川東高校、こちらも昨年から大きく順位を伸ばし、24位にくいこみました。

《文責　登山専門委員長　二瓶　伸一》

第50回北海道高等学校登山選手権大会兼
第55回全国高等学校登山大会北海道予選会

期　日　2011年6月21日(火)～24日(金)
当番校　北海道小樽桜陽高等学校
協力校　北海道小樽潮陵高等学校
参加校　男子11校　女子7校
成　績　男子最優秀　北海道札幌北高等学校
　　優秀　北海道帯広柏葉高等学校
　　優秀　北海道旭川北高等学校
　　女子最優秀　北海道旭川東高等学校
　　優秀　北海道札幌南高等学校
　　優秀　北星学園女子高等学校

登山競技は「登山を愛するのみならず、逞しく生きていくための、体力、知識、経験、緻密さ、そしてマナー」が要求される特殊な競技です。

今回は岩内岳から目国内岳そして前目国内岳を経て新見峠までの縦走。翌日はニセコ連峰の羊蹄山を、登りは京極コース、下りは真狩コースを利用しての登山。

開会式はニセコアルペンホテル、その後、山の基礎知識、救急医療の知識を問うペーパテスト。続いて4時からは、ラジオの気象通報を聞き、翌日の山の気象を把握するための天気図審査を実施。

登山第1日目は4時起床、バスで登山口となる、いわない国際スキー場へ移動。天候は曇り。旧リフトに沿って登り、6合目からは本格的な登山道。途中小雨がぱらつく。岩内岳頂上からは雷電山の分岐を右にみて、パンケメクンナイ湿原を目指す。途中残雪のため、登山道と思われる雪上を歩き続けるが、ブッシュのため、歩行不可能となり、登山隊は一時休止。コースパイロットが歩行可能なルートを見つけるまで待つ。難儀しながらも、湿原を通過し、目国内岳の登り口に到達。常に登山隊の先を行歩き、登山隊を待ち受ける審査隊も悪戦苦闘のようでした。

目国内頂上を走破し、前目国内を経て、ゴールの新見峠に到達。ほとんどの選手は元気で、余力を残して下山。女子は男子よりかなり遅れる。新見峠からバスで幕営地の羊蹄山自然公園キャンプ場へ移動し、設営審査と炊事審査。20時に一斉就寝。テント場が、一瞬にして静かになる。

登山第2日目は3時30分起床、各パーティそれぞれ朝食をとり、5時にバス乗車、羊蹄山京極コース登山口へ移動。羊蹄山はきつい山です。思ったより雪渓が少なく、予定通りの登山道を行く。疲労のため遅れるパーティが出始める。8合目付近では疲労がピークに達するが、先頭を行く集団は

元気に登山隊長について行く。京極ピークは大休止。ザックを置いて、ピストンで頂上へ。その後、外輪山を回り、下山ルートの真狩コースへ。登りでは疲労困憊していた選手もペースをつかみ、それほど遅れることもなくベースキャンプへ到着。大きなケガもなく、大会は無事に終了。

◎専門部より

2011年度の活動について報告します。

1　第１回登山専門委員会

平成23年５月13日㈮

北海道札幌南高等学校

議題

(1)　各支部専門委員および事務局確認

(2)　各支部体制

(3)　全道登山大会について

(4)　その他の議題

ア　次年度以降の全道登山大会開催支部・当番校について

イ　道岳連関係について

2　第２回登山専門委員会

平成23年６月21日㈫

ホテルニセコアルペン

議題：全道大会について

(1)　コース状況、運営上の留意点、通信体制

(2)　専門委員役割分担、審査確認

(3)　ペーパーテスト問題等の確認

3　第３回登山専門会議

平成24年２月３日㈮に予定

◎第55回全国高等学校登山大会報告

８月９日㈫から13日㈯までの５日間、青森県を代表する岩木山と北八甲田山系を会場として開催されました。東日本大震災の影響が懸念されましたが、大会実行委員会と近県の尽力により、充実した有意義な大会となりました。今大会から、制限時間以内に各校パーティが独自の判断で行動する「パーティ行動」が始めて実施されましたが、大きな混乱もなく、無事終了しました。岩木山での行程は２日間。全装備での登山なので、男女ともに各自12から14キロほどのメインザックを担いで行動。たいへん苦しかったと思います。体力の差がはっきり出ました。３日目の八甲田はサブザックでの行動。岩木山、八甲田はともに素晴らしく、登る者を魅了する山でした。八甲田は明治時代に旧陸軍の遭難事件があった山としても知られています。今回のコースはその地点を通りませんでしたが、地元の登山者たちは、その場所は夜になると今でも薄気味悪いとのことでした。全国大会の審査基準はとても厳しいのですが例年、上位校の点差はわずかであり、ちょっとした気のゆるみや些細なミスで順位が入れ替わります。

男子北海道代表の札幌北高校は大健闘し、５位入賞を果たしました。女子代表の旭川東高校は昨年より順を伸ばし、18位でした。両校の選手監督お疲れ様でした。

（文責　登山専門委員長　中條　伸義）

優勝の喜び〈登山　男子〉

札幌北高等学校

「優勝しなければならなかった。」前々年度、準優勝。前年度、優勝。と先輩方から受け継がれてきたバトンを、自分達の代で途絶えさせることは許されなかった。

追う立場から追われる立場へと変わった自分達は、オフシーズンも休むことなく、暑さ対策のウインドブレーカーを着て、重くしたザックを背負い、階段を昇り降りした。大腿部の筋肉痛が無くなることはなく、何度も挫折しそうになったりもした。辛い練習から手を抜いて顧問から怒られたこともあった。そんな練習を経て挑んだ札幌支部大会ではミスが目立ち、自分達の練習が未熟であったことを痛感させられた。気づいたときには全道大会まで残り2週間ほどしかなく、自分達に足りなかったものを見つめ直し、体力的にはよりいっそう意識したトレーニングを行い、知識的には土台から詰め直して完璧にし、大会山域について徹底的に調べたりした。また、下見登山が出来ないことを補うために何度も繰り返し机上登山を行い、地点確認テストでは何処を出されても答えられるように歩数を数えたりもした。

大会当日、プレッシャーに押し潰されそうになりながら、支部大会でのミスがないように出来る限りのことを行った。序盤から多少のミスはあったものの順調な滑り出しで、終盤も難なく切り抜けることが出来た。正直、最優秀で「札幌北」の名前が呼ばれることに自信があり、名前が呼ばれた時は歓喜よりも安堵の気持ちが勝っていた。

北東北大会では今大会で見つかった体力・歩行技術の課題を克服し、北海道代表である誇りと共に、先輩から受け継がれてきたバトンを次へ繋げられるよう、高い目標を持って挑みたい。

（主将　坂本　大地）

優勝の喜び〈登山　女子〉

旭川東高等学校

今年の道予選では、「途中で絶対にバテない」という目標がありました。中学では帰宅部だったので、体力が全くなかった去年と比べ、どれ程成長できたのか自身で確認しかったのです。3連覇のため、昨年辛勝の札幌南高に負けぬよう、特に地図読みに集中し、課題の地点確認を改善しました。私の課題は体力不足でしたから、昨年より多い練習登山では、登り方に気を遣り、ペース配分を考え、先輩方について行くよう努力しました。大会では天気に恵まれませんでしたが、全行程を走破することができました。目国内頂上は「龍の背」と呼ばれる岩場でした。身を乗り出して見た景色はまさに絶景でした。羊蹄は、ひたすら登り、ひたすら下る、とても登りごたえ（!?）のある山でした。登り8合目の岩場からは、隊長が意識的にペースを上げたせいか、自分たちを鼓舞するはずの声でかえってバテそうになりました。下りは、強風の岩場、雪渓、ガレ場等、様々に変わる足場に苦戦しましたが、無事に下山出来ました。

今年も優勝杯を持ち帰ることができ本当に嬉しかったです。支えてくださった方々、何より練習登山や買い物へと自身の休日を潰してご指導くださった顧問の先生と、全くの初心者の私を引っ張り最優秀賞に、そして全国大会へと導いてくださった先輩に、心から感謝しています。

先輩が引退し、現在男女合わせて4人です。このままだと来年は支部大会にさえ正規に出られなくなるので、山の楽しさを多くの人に伝え、賑やかな部活になるよう私なりに努力したいと思っています。

（主将　千葉　寛子）

第51回北海道高等学校登山選手権大会兼
第56回全国高等学校登山大会北海道予選会

期　日　2012年６月26日(火)～29日(金)
当番校　北海道岩見沢東高等学校
参加校　男子11校　女子10校
成　績　男子最優秀　北海道札幌北高等学校
　　優　秀　北海道札幌南高等学校
　　優　秀　北海道北見北斗高等学校
　　女子最優秀　北星学園女子高等学校
　　優　秀　北海道帯広柏葉・農業高等学校（合同チーム）
　　優　秀　北海道旭川東高等学校

登山の大会ではどのように順位をつけるかとよく聞かれます。審査は10の項目で行われます。「体力30点」、「歩行技術20点」、「装備品10点」。幕営地での「設営・撤収５点」および「炊事５点」。「気象５点」ではラジオを聞いて天気図を作成し、その完成度をチェックします。「記録・計画５点」では行動記録の正確さ、および計画書の内容を見ます。「行動テスト５点」では登山行動中に隊長が現在地の確認、植生等を問います。「ペーパーテスト10点」では基本的な救急医療および登山についての基本的知識を問います。「マナー５点」では岳人としてマナーを見ます。それぞれの項目を審査員が点数化し、100点満点で採点し順位が決まります。ちなみに男子優勝の札幌北高校は89.2、２位の札幌南高校は87.5、３位の北見北斗高校は86.3でした。全国大会ではもっと僅差で順位が決定します。

さて、平成24年度の全道大会は新十津川ふるさと公園「青少年交流キャンプ場」を幕営地として、第１日目は樺戸山地の最高峰であるピンネシリ。ピンネシリとはアイヌ語で「男山」を意味します。登頂には３コースありますが、今回は砂金沢コース。砂金沢の林道を１時間ほど歩き登山口へ。ピンネシリと待根山のコルから待根山へ向かう。その後Ｕターンしてピンネシリへ。そして同じ登山道を使って下山。

第２日目は山のベテランでも根性が入る雨竜沼湿原～南暑寒岳～暑寒別岳～暑寒別荘という９時間前後の時間を要するコースです。雨竜沼湿原～南暑寒岳までは元気の良かった選手たちも、暑寒別岳の頂上直下ではかなり疲れたようでした。頂上から下山口の暑寒別荘までも遠い道のり。女子隊は体力の差がもろにでました。天候にも恵まれ、充実した大会でした。

第３回全国高等学校選抜クライミング選手権大会
北海道予選会

期　日　2012年10月28日(日)
成　績　男子１位　菅原　浩介（遠軽高校）
　　２位　森谷　亮太（遠軽高校）
　　３位　小山　　彬（札幌稲雲高校）
　　女子１位　井上　未来（遠軽高校）

全国大会出場選手
　男子　菅原　浩介（遠軽高校）
　　森谷　亮太（遠軽高校）
　女子　井上　未来（遠軽高校）
　　橋本　菜稀（遠軽高校）

＊日山協推薦選手
佐々木里穂（北海学園札幌高校）

◎専門部より

2012年度の活動について報告します。

1　第１回登山専門委員会
　平成24年５月11日(金)
　北海道札幌南高等学校
議題
　(1)　各支部専門委員および事務局確認
　(2)　各支部体制
　(3)　全道登山大会について
　(4)　その他の議題
　　ア　次年度以降の全道登山大会開催支部・当番校について
　　イ　道岳連関係について

2　第２回登山専門委員会
　平成24年６月26日(火)
　滝川ホテル三浦華苑
議題：全道大会について
　(1)　コース状況、運営上の留意点、通信体制
　(2)　専門委員役割分担、審査確認
　(3)　ペーパーテスト問題等の確認

3　第３回登山専門会議
　平成25年２月１日(金)に予定

◎第56回全国高等学校登山大会報告

８月７日(火)から11日(土)までの５日間、新潟県の苗場スキー場にある苗場プリンスホテル敷地内を幕営地として、苗場山、平標山、三国峠を大会会場として開催されました。

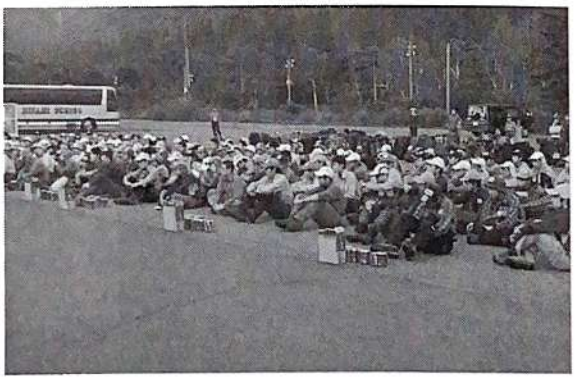
幕営地は高度が約1000メートルなので、真夏でも比較的涼しい場所でした。また天候にも恵まれた大会でした。参加選手は大会とは言え、苗場山から望む北アルプスの遠景、そして平標山からの谷川連峰の雄々しさ等、上記三山からの雄大な景色を堪能できたと思います。

さて、男子北海道代表の札幌北高校そして女子代表の北星学園女子高校は万全の準備で大会に臨みました。しかし全国大会の壁は高く厚く、残念ながら上位入賞は成りませんでした。

上位に入賞するチームは開会式後に実施される筆記試験（自然観察テスト、救急知識テスト、気象知識テスト、天気図作成）はすべて満点に近い点数を取ります。登山行動中は審査員が厳しい視点で指定された各項目をチェックしますが、各項目ほとんどノーミスと言っても過言ではありません。ちなみに今年度の男子優勝校の新潟県央工業高校は100点満点99.5、準優勝校の広島県修道高校は99.3という僅差で勝敗が分かれました。女子にも同じことが言えます。

いずれにせよ、大会のため厳しい訓練そして綿密な準備に膨大な時間を費やされた札幌北高校と北星学園女子高校の顧問と選手の皆さんに敬意を表したいと思います。

（文責　登山専門委員長　中條　伸義）



優勝の喜び〈登山　男子〉

札幌北高等学校

三連覇のかかった全道大会は、全国大会への切符を手にするために負けるわけにはいきませんでした。

今年はメンバーのうち１年生が２人、２年生が１人ですが、支部大会を含め大会経験者は３年生の私のみという厳しい状況でした。しかしだからこそ、部長でありＣＬである私が後輩を引っ張っていかなければならないという強い自覚がありました。日々のトレーニングや練習登山でも気を抜くことなく取り組むことを全員で意識し、少しずつ努力を重ねてきました。

緊張の中、全道大会が始まりました。きつい登山行動でしたが、４人全員が集中力を切らさず歩ききることができました。これが体力・歩行審査での高得点につながり、行動中テストなどでのミスを補って優勝することができたのだと思います。

今回の優勝は決して私１人では成し遂げることができなかったでしょう。ついてきてくれた後輩たちには感謝しています。本当に頑張ってくれました。また指導してくださった顧問の菅原先生には心から感謝の言葉を申し上げたいと思います。他にも様々な人に支えられてここまでくることができました。本当にありがとうございました。

全国大会では今回の全道大会で痛感した自分たちの弱点を克服し、しっかりと準備したうえで、北海道代表として恥じることのない、また自分たち自身にも悔いの残らない結果とするために全力をもって挑みたいと思います。

（主将　山本　　巧）

優勝の喜び〈登山　女子〉

北星学園女子高等学校

今年の全道大会は私達４人にとって最後の全道大会でした。長い間、一緒に登山をしてきたので、最後の大会になるかもしれないというのは寂しくもありましたが、優勝という大きな目標に向かって、自分たちの経験や力が充分に発揮できればいいなと思っていました。私達のプラス面は体力、スピード、チームワークが良いところですが、いざというときに自分やプレッシャーに負けてしまうマイナス面もあります。しかし、今回の大会では体力やスピード、仲間の存在はマイナス面をカバーするぐらいの大きな自信になりました。

大会中は天気にも恵まれ、みんな余裕を持った表情で、自然を楽しみながらの良い登山になりました。これまでの登山経験で得た知識や体力は存分に発揮できたと思います。また私達の最大の目的である山を楽しむことができたからこそ緊張で硬くなることなく、自信を持って大会に臨めたのだと思います。

私にとってこの全道大会は初めての出場だったのですが、私自身、みんなの足を引っ張らないかとても不安でした。しかし、仲間との協力を通して登山の大会は、１人ではなく、４人がいて初めて成り立つものだと改めて思いました。最優秀賞という結果は本当に嬉しく、このような賞をいただけたのも、未熟だった私達に一から登山のことを教えてくれた先生方や先輩方、そばで見守ってくれた家族のおかげです。みなさんには心から感謝しています。

これからも北星女子のワンダーフォーゲル部の伝統が永く受け継がれることを希望します。

（主将　麻田　涼子）

第52回北海道高等学校登山選手権大会兼
第57回全国高等学校登山大会北海道予選会

期　日　平成25年６月25日(火)～28日(金)
当番校　北海道遠軽高等学校
参加校　男子　12校　女子10校
成　績　男子　最優秀　北見北斗高等学校
　　優　秀　札幌北高等学校
　　優　秀　旭川北高等学校
　　女子　最優秀　旭川東高等学校
　　優　秀　札幌南高等学校
　　優　秀　北見北斗高等学校

今年の北海道大会は、世界遺産にもなっている知床連峰の斜里岳、羅臼岳で行われた。昨年度の冬は豪雪であり、例年になく残雪が多いことから、通常の登山歩行のみならず雪上での歩行技術も問われる大会となった。

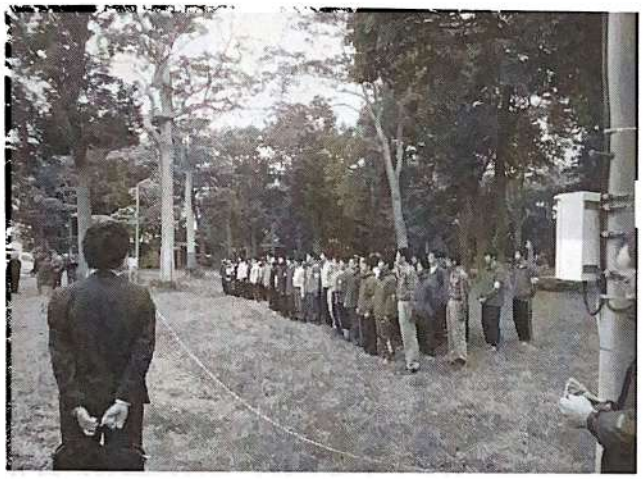
登山初日は、斜里岳（1547m）登山である。天候は曇り。前日開会式と講演が行われたホテルよりバスで登山口へ向かった。コースパイロットの先導のもと、予定通り６時過ぎに、男子隊・女子隊の順に清岳荘前登山口を出発した。コース前半の沢歩きは、渡渉を繰り返す中で岩に足を滑らせ靴を濡らす者以外は、大きな怪我もなく各パーティーは順調に高度を稼いでいった。滝の横を歩く高巻きで高度感に冷や汗をかいたり、雪渓の雪解けによる崩壊を目撃したりと、様々な事態に遭遇しながら危険箇所を無事に通過していった。

後半の雪渓とガレ場の登りでは、途中雪渓でザイルを張っての通過もあり、各パーティーは慎重な行動を必要とし、緊張を強いられた。途中、行動中テストや装備点検テストなどが行われた。この頃から時折、雨が降る場面があり、雨具を着ての行動となった。体調不良から途中リタイアするパーティーもあったが、その他は無事に登頂した。頂上は、残念ながら霧に覆われた白一色の景色だった。下山は、尾根歩きの新道コースを滑りやすい急な路面に注意しつつ、登山口へと戻ることができた。その後、バスで知床野営場に移動し、設営及び炊事の審査が行われた。大粒の雨が降る中での審査であったため、日頃の練習の成果がはっきりと現れる審査となった。夕食後、明日の登山に備えて生徒は早めの就寝となった。

２日目は羅臼岳（1660m）である。薄曇りの残る中での出発。コースは、予定していた羅臼温泉の雪渓の状態が悪いため、男女とも岩尾別温泉からのピストンに変更となった。大沢までは、「弥三吉水」や「銀冷水」など随所に水場がある急坂をぐいぐい登り高度を上げていく。大沢では、早朝のガチガチに凍った雪渓をキックステップで慎重に登っていく。そこを抜けると、一転してハイマツの茂る樹林帯となった。「石清水」の湧き水に喉を潤して最後の岩場を登り切ったところが、頂上だ。頂上では、昨日とは打って変わって晴れ渡った天候となり遥か遠くの山々までくっきりと見ることができる。昨日登った斜里岳や硫黄山が雲海にポッカリと頭を出しているのが見え、今回最高の眺望を楽しむことができた。下山口側での小熊との遭遇などもあったが、全員無事に下山した。ホテルでの入浴後、恒例となっている夕食を兼ねた参加校同士の交流会が行われた。生徒達は、

明日は閉会式という競技を終えた充足感と心地良い疲れの中、他校生との友情を深め大いに語り合っていた。

最終日の閉会式。緊張感の中、結果が発表されると歓喜の声と悔し涙が交差する。全国大会に向けさらなるレベルアップを目指すパーティー。来年度より上位を目指してふたたび全道を目指すことを誓うパーティー。様々な思いを込め、今大会は終了した。



今大会は、例年になく雪解けが遅い上に、沢登りがあったため、通常の歩行技術だけでなく、雪上での歩行技術や沢登りの技術を必要していた。そのため困難を感じていた生徒も多かったと思う。けれども、こうした技術は春山や普段の山行の中で学んだものの応用である。今後も普段の山行での行動を大事に経験を深めていってほしい。また、本年度は女子の参加校が10校となった。来年度も今年以上に参加校が増えることを期待したい。

◎専門部より

2013年度の活動について報告します。

1　第１回登山専門委員会
　平成25年５月２日㈭
　北海道札幌工業高等学校
　議題
　(1)　各支部専門委員および事務局確認
　(2)　各支部体制
　(3)　全道登山大会について
　(4)　その他の議題
　　ア　次年度以降の全道登山大会開催支部・当番校について
　　イ　道岳連関係について

2　第２回登山専門委員会
　平成25年６月25日㈫
　知床グランドホテル　北こぶし
　議題：全道大会について
　(1)　コース状況、運営上の留意点、通信体制
　(2)　専門委員役割分担、審査確認
　(3)　ペーパーテスト問題等の確認

3　第３回登山専門委員会
　平成26年２月上旬に予定

◎第57回全国高等学校登山大会報告

８月２日㈮から６日㈫までの５日間、大分県の竹田市直入総合運動公園敷地内を幕営地として、中岳・久住山・大船山を大会会場として開催されました。大会前は九州での大会なので、熱中症など高温多湿が心配される大会になるのではと予想されましたが、三日間とも雨の多い大会となりました。また、幕営地は高度が約500メートルの高台に位置し、真夏でも比較的涼しい場所でした。

九州最高峰の中岳（1791m）を始め、船を逆さまにした形の大船山（1786m）、久住連山の主峰久住山（1786m）と百名山の山々を選手たちは自らの足で歩き、北海道とは違った九州の山々の雄大な景色を堪能できたものと思います。

登山行動３日間とも雨にたたられ、最終日の５日に至ってはあまりの豪雨のため、登山行動が一時間遅れるという悪条件の中、男子北海道代表の北見北斗高校そして女子代表の旭川東高校は、参加46県中唯一「熊鈴」を鳴らしながらよく歩き、読図や記録に頑張っていました。

残念ながら上位入賞は成りませんでしたが、その健闘を称えたいと思います。

（文責　登山専門委員長　大井　　聡）

優勝の喜び〈登山　男子〉

北見北斗高等学校

今年の全道大会は、実は優勝できるとは思っていませんでした。今年のメンバーは、２年生が２人・３年生が２人で、全道大会には過去に、僕が１回、もう１人の３年生が２回出場しており、先生からも「優勝が狙える」と言われていました。しかし、この大会でのチームの目標は、『勝つこと』ではなく『楽しむこと』だったからです。

「大会とはいえ、せっかく山に登るのだから、そして３年生にとっては最後の山なのだから、やるべきことはやって『登山』を『山』を楽しもう。」チームの４人ともそういう思いで臨みました。

迎えた大会初日は天候に恵まれず、下山時には雨まで降っていましたが、２日目は何とか晴れてくれました。最後の山で雨と晴れ両方味わえたので、これはこれで楽しめました。もちろん山を楽しむとは言っても、歩行審査や行動中テストで手を抜くことはしません。全力で楽しむために、やるべきことも全力でやりました。この心持ちが、もしかしたら優勝につながったのかもしれません。

今回の優勝は、全力で山を楽しんだ結果ついてきたものです。もちろん僕だけではここまでの結果がついてきてくれなかったでしょう。ここまで一緒に頑張ってくれた後輩と女子パーティー、応援してくれた顧問の先生方に家族、他にも様々な人に支えられてここまでこられたんだなと思います。

これからも、皆で支えあいながら北見北斗山岳部が山を楽しんでくれることを願います。

（主将　髙橋　知里）

優勝の喜び〈登山　女子〉

北海道旭川東高等学校

「インターハイに行きたいです。」ずっとそう思っていつづけて、今年の夏、ようやくその夢を実現することができました。過去に先輩達がつかんだ、３年連続全国大会出場というすばらしい記録を目の当たりにしてきた私たちは、絶対に自分たちも行きたい、と１年生の頃から思っていました。しかし、昨年の大会では３位。全く優勝に届かず、たいへん悔しい思いをしました。それから今年まで、部員一同で試行錯誤を繰り返しながら活動を続けてきました。そしてようやくつかんだ今年の優勝、インターハイ出場は本当にうれしかったです。

全道大会中は、天気に恵まれませんでしたが、２日目の羅臼岳山頂で見た美しい雲海は今でも私の目に焼きついています。これが最後の登山になるかもしれない、と思いながら見ていると、自然と涙があふれてきました。記録としては、ペーパーテスト・天気図共に実力を発揮しきれず、あまり満足のいく結果ではありませんでしたが、４人がしっかり歩ききることができ、昨年からの課題であった行動中テストなどの改善ができてよかったです。

ここまで、私たちの登山をたくさんの方々が応援してくださっていたことを、今後も忘れずにいたいです。そして、一緒に山登りをしてきた部員、先生方、諸先輩方、今まで本当にありがとうございました。これからも高校山岳部で学んできたことを存分に発揮していけるよう頑張ります。

（主将　片岡　美菜）

第53回北海道高等学校登山選手権大会兼
第58回全国高等学校登山大会北海道予選会

期　日　平成26年６月24日㈫～27日㈮
当番校　北海道帯広柏葉高等学校
参加校　男子　14校　女子10校
成　績　男子　最優秀　帯広柏葉高等学校
　　優　秀　旭川東高等学校
　　優　秀　札幌北高等学校
　　女子　最優秀　帯広柏葉高等学校
　　優　秀　北見北斗高等学校
　　優　秀　札幌南高等学校

今年の北海道大会は、東大雪山系にあるウペペサンケ山、ニペソツ山で行われた。ウペペサンケは、アイヌ語で「雪解け水をどっと押しだしてくる」という意味だそうですが、昨年度の斜里岳・羅臼岳とは打って変わってほぼ夏山とみなせる歩きやすい登山道だった。

登山初日は、ウペペサンケ山（1848m）登山である。天候はほぼ快晴。前日開会式と講演が行われたホテルよりバスで登山口へ向かった。コースパイロットの先導のもと、予定通り６時過ぎに、男子隊・女子隊の順に登山口を出発した。歩きだしてすぐに最終水場に到着。服装を整え、歩き出した当初は割と緩やかな斜面が続く。1100mから1399mにかけては割と背の高い林に覆われた急登をやぶ蚊と大量の汗に悩まされながら、1610mのニセピークに到着。途中、行動中テストや装備点検テストなどが行われた。稜線をたどる登山道を越えると、最後のレキ地帯をガシガシと登りきって頂上に到着した。体調不良から途中リタイアするパーティーもあったが、その他は無事に登頂した。

頂上は、足元にコマクサが所々咲き乱れる花畑になっており、雌阿寒や東大雪の山々、遠く十勝岳連峰も見渡せる360度の大パノラマであった。30分ほどの昼食も兼ねた休憩中も風景の撮影や植物観察に余念のない生徒たちだった。下山は、登頂したコースを逆にたどる道筋で、滑りやすいレキ地帯を慎重に降りつつ、登山口へと戻ることができた。その後、バスで野営場に移動し、設営及び炊事の審査が行われた。選んだ場所によって若干の立てにくさ・ペグの効きの悪さなどがあり、審査の分かれ目となった。今回は、肉の腐敗防止やメニューに工夫をこらしたパーティーがかなりあり、他のパーティーの参考になるものが多かったように思う。夕食後、明日の登山に備えて生徒は早めの就寝となった。

２日目はニペソツ山登山（2012m）である。登山口からなだらかな樹林帯の登りを抜けると、一変して小天狗までは急登となり、穏やかな快晴の空のもと息を切らしながらぐんぐん高度を稼いでいく。小天狗ではちょっとした岩場があり、緊張を強いられる。天狗のコルでいったん小休止をとり、ハイマツ帯・ミヤマハンノキのトンネルを抜け振り返ると、表大雪の山々やトムラウシ山が見事なビューポイントなる。男子隊・女子隊ともここまで支障なく進んで、さらに登っていくと、突然ニペソツ山のピラミッドが眼前に現れる。この後が最大の難所標高差130mのアップダウンである。途中、熊の糞を何度か目撃しながら、慎重に

下りを降り、頂上直下のガレ場を過ぎると東側が切れ落ちている狭い頂上となる。男子隊は、到着してそうそう行動中テストで200mℓのお湯を沸かした後、昼食休憩となった。

先ほどまでの晴天とは打って変わって雨雲が近づいてきており、昼食後早々の出発となった。帰りは往路と同じで、登り返しやガレ場もあり、疲れた体を鞭打ち慎重に下山をし、何事もなく全員下山口に到着した。

ホテル・旅館での入浴後、恒例となっている夕食を兼ねた参加校同士の交流会が行われた。地元産のジンギスカン・各種野菜が振る舞われ、生徒達は、明日は閉会式という競技を終えた充足感と心地良い疲れの中、他校生との友情を深め遅くまで大いに語り合っていた。

最終日の閉会式。3日間の大会を締めくくるのに相応しい快晴の中、結果が発表されると歓喜の声と悔し涙が交差する。本年度は、地元帯広柏葉高校の男女アベック優勝となり、3日間の登山大会は大きな事故もなく無事閉会となった。

今大会は、東大雪地区という静かなしかし一級の山々が集う自然地域を会場とし、頂上からは360度人工物が見られない大自然の中での登山が楽しめました。特殊な歩行技術を必要としないだけに、普段の練習成果がよく表れた大会となりました。今後も普段の山行での行動を大事に経験を深めていってほしいと思います。

また、本年度は昨年度同様女子の参加校が10校となりました。来年度も今年以上に参加校が増えることを期待したいと思います。

◎専門部より

2014年度の活動について報告します。

1　第1回登山専門委員会
　平成26年5月8日(木)
　北海道札幌工業高等学校
　議題
　(1)　各支部専門委員および事務局確認
　(2)　各支部体制
　(3)　全道登山大会について
　(4)　その他の議題
　　ア　次年度以降の全道登山大会開催支部・当番校について
　　イ　道岳連関係について

2　第2回登山専門委員会
　平成26年6月24日(火)
　糠平館観光ホテル
　議題：全道大会について
　(1)　コース状況、運営上の留意点、通信体制
　(2)　専門委員役割分担、審査確認
　(3)　ペーパーテスト問題等の確認

3　第3回登山専門委員会
　平成27年2月上旬に予定

◎第58回全国高等学校登山大会報告

8月8日(金)から11日(火)までの5日間、神奈川県の箱根町レイクアリーナ箱根敷地内を幕営地として、神山・早雲山、金時・明神、三国山を大会会場として開催されました。大会前より台風の接近が報じられており、雨天での大会となることが予想されていましたが、開会式はうす曇りの中時折晴れ間がのぞく中での開会となりました。地元神奈川県の誇るチアリーダー達の素晴らしいアトラ

クションで始まった大会はアリーナ・サブアリーナを使っての筆記審査となりました。その後コース隊編成を経て、一回目の設営審査・装備審査・炊事審査となりました。A隊（男子）は装備審査にかなりの時間を費やした結果、B隊（女子）に比べかなり遅い時間での設営・炊事審査となりましたが、天候も持ち薄暮に富士山がみえる中無事初日の審査を終了することができました。

登山行動初日はA隊は神山・早雲山コース、B隊は金時山と異なるコースでしたが、行程の最後で若干の雨に降られた以外は、予想された悪天候にはならずそれぞれのコースを堪能できたものと思います。

しかし、夕方から台風が上陸し、次第に風雨が激しくなったため、登山行動2日目はやむなく中止、避難場所であるアリーナでの大交流会となりました。結果的には、全国から来た登山仲間と男女問わず親睦を深めることができ、よい待機時間だったと思います。登山行動3日目は、A隊とB隊がコースの反対側から登る交差縦走が行われ、交差地点となった山伏峠付近ではハイタッチでお互いの健闘をたたえあう光景が見られました。

台風の影響で、登山行動全日が風雨にさらされるという悪条件の中、北海道代表の帯広柏葉高校は、長い山道をよく歩き読図や記録に頑張っていました。

残念ながら上位入賞は成りませんでしたが、その健闘を称えたいと思います。

（文責　登山専門委員長　大井　　聡）

登　山

専門部長　　湯　田　恭　文
専門委員長　　山　納　秀　俊
〒047-0002　小樽市潮見台２丁目 1-1
北海道小樽潮陵高等学校
ＴＥＬ　0134－22－0754
ＦＡＸ　0134－22－5954

◎第 54 回北海道高等学校登山選手権大会兼
第 59 回全国高等学校登山選手権大会北海道予選会

期　日　平成 27 年 6 月 23 日（火）～26 日（金）
当番校　北海道札幌西高等学校
参加校　男子 14 校　女子 11 校
成　績　男子　最優秀　旭川東高等学校
　　優　秀　帯広柏葉高等学校
　　優　秀　札幌南高等学校
　　女子　最優秀　旭川東高等学校
　　優　秀　札幌南高等学校
　　優　秀　釧路湖陵高等学校

インターハイの登山競技は、4 人で 1 パーティを組み、安全登山に必要な体力、技術そして山の知識を競う。

今年は、男子 14 パーティ、女子 11 パーティ、計 100 名が参加し、過去 10 年でみると最も多いものとなった。会場地は、いずれも支笏洞爺国立公園に属する風不死岳、樽前山、羊蹄山である。

全道大会では、開会式の後、始めに登山の基礎知識、救急法や気象に関する知識、会場地の山域に関するペーパーテストが行われる。その後、講演を挟んで天気図作成の審査があり、2 日目から登山行動に入る。

登山行動では体力・歩行技術はもちろん、山中での地形と地図を読む力や植物等の知識、行動記録、安全登山に必要な装備や服装も審査の対象となる。登山が終了し幕営地に戻るとテントの設営や炊事の審査がある。安全に山に登る知識と技術、パーティシップ・マナーを含め、登山に関する全てが盛り込まれた競技となっている。

今年の大会を振り返ると、登山行動初日の風不死岳から樽前山の縦走時は曇り、2 日目の羊蹄山は小雨が降るなど天候には恵まれなかったが、選手たちは登山中だけでなく、幕営地や開閉式会場を含め大変よく動き、全体的にすばらしい大会となった。

体力審査では、男子はかなり速いペースで歩いたにも関わらず、上位パーティは甲乙付けがたく大きな差は出なかった。女子についても特に悪天下の羊蹄山はかなりハードなコースであったが、
全てのパーティがリタイアせずに歩ききったことは大変評価できる。一方、技術面では男女ともに下りの歩行技術でやや差が見られた。

全項目合わせて 100 点満点で順位を付けるが、男子上位 5 校は本当に僅差で 1 位と 5 位の差もわずか 2 点しかない。どこが勝ってもおかしくない状況だった。そして男子 14 パーティの内 11 パーティまでが 80 点以上というハイレベルの戦いだった。女子は体力歩行で差がついたが、トレーニングをしっかり積んだパーティでなければ女子にはきついコースだったかもしれない。（文責　登山専門委員長　山納　秀俊）

風不死岳の登山行動

登　山

専門部長　　湯　田　恭　丈
専門委員長　　山　納　秀　俊
〒047-0002　小樽市潮見台２丁目 1-1
北海道小樽潮陵高等学校
ＴＥＬ　0134－22－0754
ＦＡＸ　0134－22－5954

◎第55回北海道高等学校登山選手権大会兼
第60回全国高等学校登山選手権大会北海道予選会

期　日　平成 28 年 6 月 21 日（火）～24 日（金）
当番校　遺愛女子高等学校
参加校　男子 14 校　女子 13 校
成　績　男子　最優秀　旭川東高等学校
　　優　秀　釧路湖陵高等学校
　　優　秀　帯広柏葉高等学校
　　女子　最優秀　旭川東高等学校
　　優　秀　札幌南高等学校
　　優　秀　小樽潮陵高等学校

インターハイの登山競技は、4 人で 1 パーティを組み、安全登山に必要な体力、技術そして山の知識を競う。今年は、男子 14 パーティ、女子 13 パーティ、計 108 名が参加し、過去 10 年間で最も多かった昨年のパーティ数をさらに 2 パーティ上回るものとなった。高体連登山部加盟校数は減少傾向にあるものの各校の女子部員が増え、チームを組める学校が増えてきたおかげである。

全道大会では、開会式の後、始めに登山の基礎知識、救急法や気象に関する知識、会場地の山域に関するペーパーテストが行われる。その後、講演を挟んで天気図作成の審査があり、2 日目から登山行動に入る。

登山行動では体力・歩行技術はもちろん、山中での地形と地図を読む力や植物等の知識、行動記録、安全登山に必要な装備や服装も審査の対象となる。登山が終了し幕営地に戻るとテントの設営や炊事の審査がある。安全に山に登る知識と技術、パーティシップ・マナーを含め、登山に関する全てが盛り込まれた競技となっている。

道南の狩場山と長万部岳を会場として開催された今年の全道大会を振り返ると、登山行動初日の長万部岳登山中の天候は晴れ、2 日目の狩場山はガスが立ちこめ眺望には恵まれなかったものの暑くもなく寒くもなくまずまずのコンディションであった。選手たちも、登山中のみならず幕営地や開閉式会場を含め大変しっかり行動し、全体的にすばらしい大会となった。

体力審査では、男子はかなり速いペースで歩いたにも関わらず、上位パーティは甲乙付けがたく大きな差は出なかった。女子についは 3 校が途中リタイアし、上位と下位の差が大きく出た。

全項目合わせて 100 点満点で順位を付けるが、男子上位 5 校は本当に僅差で 1 位と 5 位の差もわずか 2 点しかない。どこが勝ってもおかしくない状況だった。そして男子 14 パーティの内 11 パーティまでが 80 点以上というハイレベルの戦いだった。女子は体力歩行で差がついたが、トレーニングをしっかり積んだパーティでなければ女子にはきついコースだったかもしれない。

（文責　登山専門委員長　山納　秀俊）

長万部岳を背景に記念撮影

登　山

専門部長　　岡　田　　聡
専門委員長　相　田　敬　史
〒070-0036　旭川市６条通 111 丁目
北海道旭川東高等学校
ＴＥＬ　0166-23-2855
ＦＡＸ　0166-23-2623

◎第56 回北海道高等学校登山選手権大会兼
第61 回全国高等学校登山選手権大会北海道予選会

期　日　平成 29 年６月 20 日(火)～23 日(金)
会　場　カムイヌプリ～鷲別岳(室蘭岳)
　　来馬岳～オロフレ山
当番校　北海道室蘭栄高等学校
参加校　男子 13 校　女子 12 校
参加人数　100 名
成　績　男子　最優秀　釧路湖陵高等学校
　　優　秀　旭川東高等学校
　　優　秀　帯広農業高等学校
　　女子　最優秀　旭川東高等学校
　　優　秀　釧路湖陵高等学校
　　優　秀　室蘭栄高等学校

平成 29 年度の活動は、大変慌ただしい状況から始まった。３月末に雪崩事故が発生し、その影響が北海道高等学校における登山活動にも少なからずみられたと感じる。誰もが大きく活動の制約を受けるのではないかと不安な状況ではあったが、各支部とも「安全登山」を心掛け、支部大会実施に至った。その中で勝ち進んだ男子 13、女子 12、計 25 パーティが全道大会にのぞむこととなった。今年度の全道大会は、道央の室蘭を舞台に４日間の日程で実施された。

大会初日、14 時から開会式が行われ、その後ペーパーテストさらに天気図審査が行われた。その中で天気図審査は、５点満点中、全体としての平均が 3,6 点であった。女子の得点分布では、参加校における得点の幅が広く、ばらつきが大きくなっていた。上位入賞を果たすためには、体力・歩行技術面もあわせて、知識面も日常的に充分な取り組みが必要であると感じた。

大会２日目、天候は曇りで、この日のコースはカムイヌプリから鷲別岳（室蘭岳）のルートで実施された。途中、カムイヌプリ頂上手前の鎖場には十分注意が必要とされる場所もあったが、安全に終了することができた。しかし途中で、一部の生徒が身体の一部分を痛め、歩行が困難になるパーティもあった。その後宿泊場所の室蘭山麓公園キャンプ場でテント設営審査が行われたが、この頃から降雨・風力が激しさを増すようになった。19 時を過ぎた頃、さらに天候が悪化したため、今後の対応を当番校をはじめ関係者で協議し、さらにキャンプ場の状況を確認した。その結果、強い風雨による浸水の危険性や生徒の健康状態への不安により、急遽、宿泊場所を近隣体育館内へと変更し、生徒を移動させ、そこで睡眠をとることとした。

大会３日目、この日は来馬岳（鉱山町コース）からオロフレ山縦走が予定されていたが、前日の悪天候によりコース変更を余儀なくされた。５時 30 分、当番校・関係者で協議し、ルートをオロフレ峠から来馬岳の往復とし、出発時間も遅らせる決定をした。悪天候の中の山行ではあったが、この日も無事に終了するに至った。この４日間を通じ、再度「安全登山」を実施する重要性を強く感じた。大会結果として、男女それぞれの最優秀校が全国へのキップを握ったのであった。（文責　登山専門委員長　相田　敬史）

女子隊、野営場着

登　山

専門部長　　岡　田　　聡
専門委員長　相　田　敬　史
〒070-0036　旭川市６条通 111 丁目
北海道旭川東高等学校
ＴＥＬ　0166-23-2855
ＦＡＸ　0166-23-2623

◎第57回北海道高等学校登山選手権大会兼
第62回全国高等学校登山選手権大会北海道予選会

期　日　平成 30 年 6 月 26 日(火)～29 日(金)
会　場　上ホロカメットク山～十勝岳
　　オプタテシケ山
当番校　北海道旭川北高等学校
参加校　男子 13 校　女子 11 校
　　参加人数　96 名
成　績　男子　最優秀　旭川東高等学校
　　優　秀　釧路湖陵高等学校
　　優　秀　札幌南高等学校
　　女子　最優秀　釧路湖陵高等学校
　　優　秀　旭川東高等学校
　　優　秀　北星学園女子高等学校

今年度の大会会場として、５月から一時的な火山性地震の増加や継続時間の短い火山性微動が観測された道北の十勝岳がコースの１つであった。全道から集結した顧問・役員の口から「いつもより噴煙が多いね」という声が聞かれた中での実施となった。全道大会４日間の日程の中で、山行が行われた２日目、３日目は天候が悪く、雨、ガス、強風に悩まされた大会となった。

２日目、起床時間の４時の時点での天候は霧雨状態であり、山行もはじめから雨具を装着した上でのスタートとなった。男子は全荷行動の日である。スタート当初はある程度視野が効いていたが、徐々に視界範囲が狭くなり、富良野岳との分岐を過ぎたあたりから風も伴った天候となった。稜線歩行時は、強風によりあおられ、バランスを崩したり、風を避けるように低姿勢で進む姿が見受けられた。この日の通過地点である1893ｍの上富良野岳に到着した時点で審査委員長と男女各隊長がコース等を確認したところ、悪天候と視界不良とで継続歩行は危険と判断し、この地点で引き返すこととした。こうして、この日は全ルートの半分の歩行に終わった。時間が繰り上がったので、その後の幕営審査も早めに実施し、ゆっくり休養する時間が確保された。

全道炊事審査

３日目のオプタテシケ山の行程は登山開始から下山まで９時間 30 分の時間で計画された。起床時間は３時 30 分と早く、その後バスで山道入り口まで移動し、女子隊６時、男子隊６時 20 分発で開始された。登りはじめは霧雨となり、風はそれほど強いものではなかったが、美瑛富士避難小屋を過ぎコースを左に折れ石垣山に向かう時点で強風となり、視界も不良となった。途中、体調不良を訴えたパーティーもあり、男子隊全員で山頂まで行くことはできなかった。女子隊も石垣山まで到着したときに 11 時 30 分となり、この先進めば計画していた 15 時 30 分までに帰着はできないためにここで引き返すことにした。女子隊も体調不良者が出て、避難小屋で４パーティが休息をとっていた。男子隊が登山口に到着したのが 16 時と、予定を 30 分

ほど越えてしまった。

登山そのものは無事終了することができたが、両日の悪天候の中での実施で、「低体温症」等の症状にはなりはしないかということが懸念された。「安全登山」を実施するためには、さまざまな知識を持ち合わせなければならない。今回の大会では、今後、このような悪天候での対応の仕方を理解する契機となり、貴重な体験につながったのではないかと感じた。結果として、男子 1,25 点差、女子 2.925 点差で、各優秀校が決定し、全国大会への出場権を手にした。

全道閉会式

（文責　登山専門委員長　相田　敬史）

登　山

専門部長　　新　山　知　邦
専門委員長　内　海　健　一
〒050-0083　室蘭市東町 3-29-5
北海道室蘭栄高等学校
ＴＥＬ　0143-44-3128
ＦＡＸ　0143-44-3129

◎第58回北海道高等学校登山選手権大会兼
第63回全国高等学校登山選手権大会北海道予選会

期　日　令和元年 6 月 25 日(火)～28 日(金)
会　場　雄阿寒岳・雌阿寒岳
当番校　北海道釧路北陽高等学校
参加校　男子 13 校　女子 12 校
　　参加人数　100 名
成　績　男子　最優秀　帯広柏葉高等学校
　　優　秀　旭川北高等学校
　　優　秀　釧路湖陵高等学校
　　女子　最優秀　釧路湖陵高等学校
　　優　秀　旭川北高等学校
　　優　秀　旭川東高等学校

今年度の大会会場は釧路市の阿寒湖温泉を開会式会場とした、雄阿寒岳、雌阿寒岳であった。大会前週までは天候もあまりはっきりしなかったが、，大会を待っていたかのごとく天候は回復し、開会式、ペーパーテスト等を行う中、阿寒湖や雄阿寒岳などの景観を確認しながらの１日目となった。

全道開会式

２日目は朝から快晴となり、暑くなることが予想されていた。急登のある雄阿寒岳であったが、特に男子隊は速いペースでの動きとなり、下山時には３０度を超え、体力的について行けないパーティーも出てきた。女子はゆっくりのペースであったが、やはり体力差がはっきりした山行となった。山頂では、大雪山系から、日高山脈、知床半島など、３６０度のパノラマが楽しめ、心に残る登頂になったと思う。

下山後は、阿寒湖畔野営場において，幕営審査と調理審査を行った。幕営に関しては、ペグが入りやすい半面、ペグの「きき」が甘くなってしまう傾向があり、テント本体やフライシートの張りすぎによるペグ緩みや抜け、適正で無い角度などが生じていた。また、ポールのばらまきをポールの一部において行ってしまう学校が見られた。しっかりと訓練を積んでいる学校も陥ってしまっている傾向があったので、今後の反省材料にしてもらいたい。調理に関しては、おおよそよく考えられたメニューをおいしく作っていたが、大会開始から２日、３日と冷凍や冷蔵できない状況を想定し、食材の防腐対策には心を配ってほしいと思う。また、計画書の中のメニューと違ったり、計画書の中にメニューが盛り込まれていなかったりした学校も散見されたので注意してほしい。

３日目は気温もやや下がり、雌阿寒岳の稜線部からは風も吹いて寒いくらいの状況であった。１７ｋｍほどのロングコースだったので選手にはありがたい状況となった。キャンプ場から車道とスキー場の急登を経て、林道となだらかな登山道を巡りながらの山行となり、曇りがちながら，周囲の風景と阿寒特有の高山植物を楽しみながらの山行となった。最後の最後にやってくる阿寒富士の登りは体力的にも筋力的にも苦しいところだったので、学校による体力差が大きく出た部分であると思う。様々な山行に対応するためにも、しっかりと体力をつける必要性を痛感させられるコースであった。男子では上位６校，女子では上位３校

ほどが体力的に拮抗しており、歩行、装備等の行動には甲乙つけがたいものがあったが、気象やペーパーテストといった知識の部分での差が積み重なって、最優秀校と優秀校、そして順位が決まる結果となった。

雌阿寒岳へスキー場登り

昨年度の大会とは正反対の真夏日を記録した中での登山もあり、熱中症のリスクや適正なペースなど、いろいろ考えさせられる大会であった。２０２３年のインターハイを見据えて、大会内容や審査を再考する必要性を感じた大会でもあった。

様々な状況に応じて大会運営をしていただいた当番校釧路北陽高校上田校長先生、永田先生、今先生はじめ諸先生方には改めて謝辞を申し上げたい。けが無く終えられた、いい全道大会であった。

（文責　登山専門委員長　内海　健一）

登　山

専門部長　鈴　木　　淳
専門委員長　細　野　　護
〒070-0901　北海道旭川市花咲町３丁目
北海道旭川北高等学校
ＴＥＬ　0166-51-4620
ＦＡＸ　0166-51-2818

◎第 60 回北海道高等学校登山選手権大会兼
第65回全国高等学校登山選手権大会北海道予選会

期　日　令和 3 年 6 月 22 日（火）～ 25 日（金）
会　場　上ホロカメットク山～十勝岳
北鎮岳～旭岳
当番校　北海道旭川北高等学校
参加校　男子 12 校　女子 12 校
参加人数　96 名
成　績　男子　最優秀　旭川東高等学校
優　秀　帯広柏葉高等学校
優　秀　旭川北高等学校
女子　最優秀　旭川北高等学校
優　秀　旭川東高等学校
優　秀　札幌北高等学校

２年ぶりの開催となった全道大会は、令和５年度北海道総体のプレ大会としての位置づけで、インターハイの登山行動１日目に予定している上ホロカメットク山～十勝岳、２・３日目に予定している旭岳を中心とした大雪山系を会場として行われた。天気予報がころころ変わり、大気の状態が不安定であったが、４日間とも大きく天気が崩れることなく実施できたことは幸いであった。

大会初日の開会式、ペーパーテスト等は、本番を見据えて旭川市内のホテルでの実施となったが、感染予防対策を徹底し滞りなく実施できた。

２日目は､男女ともメインザックによる行動で、特に女子隊には厳しいチームもあることが予想されたので、事前に申告としてもらい、サブザックでの行動も可としたので、大きな問題なく行動できた。男子隊は全体的に体力があり、十勝岳の急登も隊長にしっかりついていった。天気もよく、表大雪、東大雪、日高山脈、夕張山地、遠くは暑寒まで見渡せる最高の条件であった。女子隊はゆっくりのペースであったが、体力差がはっきりしていた。

大会２日目　十勝岳への最後の登り（男子隊）

下山後は吹上温泉キャンプ場において，幕営審査と調理審査を行った。幕営に関しては、しっかりと練習できているチームそうでないチームの差が大きかった。調理に関しては、考えられたメニューをおいしく作っていた。新型コロナ感染予防対策で、炊事はこの一度だけとし、あとは弁当を配布したが、本来であれば大会開始から２日、３日と冷凍や冷蔵できない状況を想定し、食材の防腐対策にも心がけたメニューを考えてほしい。また、計画書の中のメニューと違ったり、計画書の中にメニューが盛り込まれていなかったりした学校も散見されたので注意してほしい。

３日目　北鎮岳から御鉢平を望む

３日目は、朝から曇りがちで気温もやや下がり、途中からガスが出て、風も吹いて寒いくらいの状況であった。今年の大雪山系は雪渓が多く残り、裾合平はほとんど雪で覆われている状況であったが、登山口から姿見駅周辺や雪渓の合間から多くの高山植物が顔を出し、山行の癒やしとなった。北鎮岳山頂もガスに覆われていたが、男子隊登頂時はガスが晴れ、御鉢平をはじめ大雪を一望できる展望となった。最後にやってくる裏旭から旭岳への登りは体力的に苦しいところだったが、男子隊は大きく差が付くこともなく、ほとんどのチームが余裕を持っての行動となった。女子隊は雪渓とガスや風に阻まれ、北鎮岳のピストンとなったが、大半のチームが登頂を果たし、記憶に残る山行となったのではないか。

３日目　中岳分岐から中岳へ(女子隊)

男子隊については、近年体力差が縮まっており、しっかりと行動できるチームが多く、体力以外の部分で順位が付く傾向にある。
女子隊は、チームによる体力差が大きく、最後まで行動できないチームが見られた。日々のトレーニングに励み、安全に楽しく山行できる体力を養ってほしい。

令和５年度北海道総体のプレ大会として、いろいろ試すことはできたが、まだまだ不十分なところが多々ある。次年度に向けて大会内容を精査し、インターハイ実施にあたっての問題点を洗い出し、円滑な大会運営ができるよう模索したい。また、審査基準を再考し、わかりやすく審査ができるよう改めていきたい。　様々な状況に応じて大会運営をしていただき当番校旭川北高等学校鈴木淳校長先生をはじめ当番校業務をお手伝いくださった諸先生方には改めて謝辞を申し上げたい。コ

閉会式　吹上温泉キャンプ場にて

ロナ禍の中ではあったが大きな問題もなく、無事大会が終えられたことに、携わっていただいたすべて方に感謝したい。

◎令和３年度全国高等学校総合体育大会登山大会
　第 65 回全国高等学校登山大会

令和２年度北関東総体すべてがコロナ禍で中止になり、準備に励んでおられた群馬県高体連登山専門部の方々にはかける言葉もないが、一年越しの福井大会は、どうしても実施したいという強い思いもあり、登山行動を２日間とし、テント泊や炊事審査を取りやめ、大会規模を縮小して何とか実施できる方向に計画していただき、大会開催にこぎ着けることができた。福井県実行委員会の方々には深く感謝したい。

８月２０日　開会式会場

大会は、東京オリンピック開催の関係で、例年より遅い８月２０日から８月２３日の日程で、福井県勝山市の三頭山と取立山を会場に開催された。開会式会場の勝山市体育館ジオアリーナは 2016 年に完成した最新設備を備えた立派な施設

で、８月２０(金)、全国から各 46 地区の予選を勝ち抜いてきた選手が一堂に集まり、盛大に行われた。その後、ジオアリーナ内において各テスト、隣接した勝山高校で天気図審査が行われ、体育館でＡＢ各コース隊編成、引継式、装備審査、隣接する長山公園グラウンドに移動しての設営審査となった。審査終了後、Ａ隊は宿泊場所であるジオアリーナへ移動し、Ｂ隊は奥越高原青少年自然の家へバスでの移動となった。

８月２１日　勝山城博物館を後にする旭川東Ａ隊

大会２日目は、Ａ隊はジオアリーナから隊行動で菩堤林入口に移動し、ここからＢ隊とともにメインザックでのチーム行動で三頭山を目指し、大師山を経て越前大仏まで縦走した。平泉寺白山神社内の菩堤林入口からは石畳の階段が続き、白山(越前)禅定道を偲ばせる。現在は通行不可区間があり、白山には通じないが、歴史を十分に感じさせる登山道である。その後隊行動で設営審査会場まで行動し、審査終了後宿泊地への移動となった。心配された暑さも、気温はそれほど高くならず、曇りがちではあったが本州特有の蒸し暑さもなく

休憩中は必ずマスク着用　旭川北Ｂ隊

過ごしやすい天候であった。

大会３日目は、いこいの森入口からＡ隊Ｂ隊ともメインザックでのチーム行動でこつぶり山を目指した。こつぶり山からは、パーティー行動となり審査からも開放され、途中の大滝では滝つぼに下って涼をとる姿が見られた。

８月２２日　大滝　旭川北Ｂ隊
監督とパーティー行動

ジオアリーナに戻って、解団式が行われ、隊長や班長との交流が行われ、和やかな解団式となった。

８月２２日　解団式　旭川東Ａ隊
第８班の仲間と班長･副班長

８月２３日(月)、閉会式も滞りなく実施され、次期開催県の香川県に大会旗等の引継式が行われた。来年度はいよいよ北海道に引き継がれ、令和５年度は北海道インターハイの開催となる。

北海道のチームは、全国大会の独自の審査や全

装行動、天候に苦しめられながらも、しっかりと最後まで歩き通し、男子２６位９３．１点、女子４０位８１．４点という結果になった。

２年後のインターハイ開催に向けて、体力強化や各審査項目に対応する対策をとる必要性を感じた。審査方法も、全国大会と違う部分が多く、今後のことを考えると見直す時期にきている。ただ、６月の北海道予選会の段階では、多くの山域で登山道に雪渓が残るため、全国大会の運営方法では安全性に大きな問題が生じるため、いろいろ工夫する必要がある。

（文責　登山専門委員長　細野　護）

◎専門部より　令和３年度の活動を報告します。

１　第１回登山専門委員会
令和３年５月７日(金)
北海道旭川北高等学校(事務局校)
議題
(1)令和２年度登山専門部及び加盟金決算、令和３年度予算
(2) 道高体連登山専門部専門委員の確認
(3) 全国常任委員の確認
(4) 各支部加盟校、部員数及び顧問の確認
(5) 令和３年度全道大会について
(6)令和３・４年度全国大会について
(7)令和５年度北海道インターハイに向けて
(8) 次年度以降の全道大会開催支部、当番校についての確認
(9) 専門部事務局担当支部ローテーションブロックについての確認
(10) クライミング大会について
(11)その他

２　第２回登山専門委員会
令和３年６月２２日(火)
アートホテル旭川
(1) ペーパーテスト問題等の確認
(2) 大会説明(コース状況等)
(3) 通信体制
(4) 荒天対策　等

３　IH 指導者養成研修会
令和３年１０月２日(土)～３日(日)
吹上温泉白銀荘　十勝連峰
１日目　インターハイ概要説明
２日目　十勝岳温泉～上富良野岳　登山研修

４　第３回登山専門委員会
令和２年２月４日(金)に予定
北海道旭川北高等学校

登　山

専門部長　木　幡　かおる
専門委員長　細　野　　護
〒070-0901　北海道旭川市花咲町３丁目
北海道旭川北高等学校
ＴＥＬ　0166-51-4620
ＦＡＸ　0166-51-2818

◎第 61 回北海道高等学校登山選手権大会兼
第66回全国高等学校登山選手権大会北海道予選会

期　日　令和 4 年 6 月 21 日（火）～ 24 日（金）
会　場　旭岳
黒岳～北鎮岳～裾合平
当番校　北海道旭川工業高等学校
参加校　男子 13 校　女子 11 校
参加人数　96 名
成　績　男子　最優秀　旭川東高等学校
優　秀　札幌北高等学校
優　秀　帯広柏葉高等学校
女子　最優秀　旭川東高等学校
優　秀　札幌北高等学校
優　秀　旭川北高等学校

令和５年度北海道総体のプレ大会としての位置づけで、インターハイの登山行動２日目に予定している黒岳～北鎮岳～裾合平、３日目に予定している旭岳を会場として行われた。大会本部･幕営地についても、北海道総体と同じ東川Ｂ＆Ｇ海洋センター･東川町民運動公園とし、本番に向けての初めてのシミュレーションとなった。

当初の天気予報では、２３日には大陸からの低気圧が近づき崩れることが予想されたが、思ったよりも動きが遅く、２日間の山行中は雨に打たれることもなく予定通り実施出来たことは幸いであった。

大会初日の開会式、ペーパーテスト等は、本番を見据えて旭川市内のホテルでの実施となったが、感染予防対策を徹底し滞りなく実施できた。

２日目の旭岳は、男女ともメインザックによる行動で、特に女子隊には厳しいパーティーもあることが予想されたので、事前に申告としてもらいサブザックでの行動も可とした。男子隊･女子隊とも大きな体力差が見られ、隊離脱するパーティーが多数見られたのは残念であった。特に男子隊

【大会２日目　旭岳温泉登山口登山開始】

は隊長の頑張りもあり、旭岳山頂までついて来たのは４パーティーだけであった。山頂はガスがかかり少し肌寒い気温であったが、ゆっくり休憩を取り安全に下山できた。

下山後は東川町民運動公園において，幕営審査と調理審査を行った。幕営に関しては、しっかりと練習できているチームそうでないチームの差が大きかった。また、３密を避けるため４人用テントに２人の定員とし、もう一つ４人用テントを用意してもらい設営した。調理に関しては、新型コロナ感染予防対策のため、皆で一緒に食べるようなメニューは不可とし、レトルトやα米のみも可とした。審査も少し簡略化し観点を絞って実施した。炊事はこの一度だけとし、あとは弁当を配布したが、本来であれば大会開始から２日、３日と冷凍や冷蔵できない状況を想定し、食材の防腐対策にも心がけたメニューを考えなくてはいけない。夏合宿ではこのような点を考慮し、食糧計画を立ててほしい。

３日目は、早朝から小雨が降りガスもかかってあいにくの天気であったが、黒岳ロープウェー、リフトと乗り継ぐにつれ天候が回復し、まずまずの登山日和となった。今年の大雪山系は雪渓が多く残り、裾合平はほとんど雪で覆われている状況であったが、稜線上や雲ノ平、姿見の池、夫婦池

【大会３日目　黒岳から北鎮岳を望む】

周辺では雪渓の合間から多くの高山植物が顔を出し、山行の癒やしとなった。

コースは距離は長いが高低差はあまりなく、男子隊･女子隊ともサブザック行動だったため、黒岳で下山したパーティーを除き、隊から遅れることなく縦走できた。雲ノ平では、ヒグマが登山道を横切ったのを見つけたため、男子隊が黒岳石室で少し停滞することとなったが、安全確認後出発することができた。黒岳石室の管理人よると今年はヒグマが頻繁に御鉢平に出入りを繰り返しているとのこと、遭遇を避けるために人間が常に注意を払い、ヒグマとの共存を図れることを望む。

北鎮分岐直下の雪渓は、急斜面で少し硬かった

【大会３日目　北鎮分岐直下の雪渓】

【大会３日目　北鎮岳から御鉢平　女子隊】

ので､ピッケルでステップを作り安全に通過した。中岳温泉上の雪渓は雪が少なく問題はなかった。

【大会３日目　裾合平から旭岳白鳥の雪渓】

男子隊･女子隊ともパーティー間、またパーティー内の体力差が大きい。しかし、上位の数パーティーはよく鍛えられほとんど差はない。安全登山において、いろいろな知識を身につけることも必要であるが、最も重要なことは体力を付けることである。日々のトレーニングに励み、余裕を持って楽しく山行できる体力を養ってほしい。

【閉会式　東川Ｂ＆Ｇ海洋センター体育館】

令和５年度北海道総体のプレ大会として、いろいろ試すことはできたが、まだまだ不十分なところが多々ある。来年度はいよいよインターハイ本番である。大会内容を精査し、問題点を洗い出し、円滑な大会運営ができるよう模索したい。

また、審査方法を大きく改正し、全国大会に近い形の審査とした。審査員がわかりやすく審査ができるよう改めたつもりではあるが、まだまだ不備な部分があり次年度への課題である。しかし、審査が大きな混乱もなく行えたことはよかった。

様々な状況に応じて大会運営をしていただいた

当番校旭川工業高等学校稲津誠校長先生をはじめ当番校業務をお手伝いくださった諸先生方には改めて謝辞を申し上げたい。また、コロナ禍の中ではあったが大きな問題もなく無事大会が終えられたことに、携わっていただいたすべて方に感謝したい。

（文責　登山専門部専門委員長　細野　護）

◎令和４年度全国高等学校総合体育大会登山大会
　第 66 回全国高等学校登山大会

期　日　令和４年８月５日（金）～９日（火）
会　場　香川県仲多度郡まんのう町
　　笠形山・竜王山・大川山

今回の大会は私にとって４回目の参加であった。初めて生徒を率いて参加したのは前任校の釧路湖陵の時、平成 29 年度山形総体で月山・蔵王と 100 名山の２つを登った。勝手が分からず、チーム毎のタイムレースではとにかく「早くゴールするべ」と檄を飛ばしたが、規定時間よりも大幅に早く着いたにもかかわらず、途中のチェックポイントの読図ができなくて点数が全く取れなかったことが印象に残っている。

来年度の北海道高校総体では私自身が女子コース隊長として内定しているので、今回は女子監督としての参加だが、運営側の視点もからめてこの大会を述べていきたいと思う。

【８月５日　開会式直前　旭川東Ｂ隊】

大会初日。10:00 から開会式が始まる。配宿先のホテルへバスの送え有り。選手はテントや寝袋を入れたメインザックと日帰り装備が入ったサブザックを持ち、ゼッケンを付けた帽子、ポロシャツを着てスポーツセンターまんのうへ。厳粛で晴れやかな開会式であった。ただ、今年度は時間短縮のために各学校の紹介がなく、毎年のハイライトは次年度へのお預け。また、急遽コロナウィルス関係で出場を取りやめたり、大会途中で帰校した学校もあった。開会式後、それぞれの部門毎にペーパーテストを行い、バスでことなみ未来館へ移動。グランドでテント設営・撤収審査を行い、ホテルへの帰還となる。例年は４日間テント生活であるが、今回はコロナ禍で毎回ホテルに帰る行程だ。グランドは当然灼熱地獄のため監督・選手ともありがたかった。

【８月５日　幕営審査　旭川東Ｂ隊】

２日目。今日は笠形山～雨島峠～浅木原約 18km の縦走となる。男女とも約６チーム毎の班に編成され、班長・副班長に率いられての行動。顧問隊は行程の半分で引き返し、選手の帰還を待つ。先頭はまさかの旭川東。先頭が一番点数が高いわけではないが、なぜかとてもうれしかった。

【８月６日　班行動開始　旭川東Ａ隊】

３日目。柾木～竜王山～浅木原の縦走。これも長い。ここは一部江戸時代から使われてきた香川から徳島までの峠道を歩いた。本州の山道はこうした「いにしえの道」が現代も使われていることが多く、歴史を感じる古道が多い。女子隊は竜王山付近で２時間ほどの土砂降りに遭い、大変だったようだ。この行程はチーム毎のタイムレースであった。我が校は男女とも規定時間内に歩ききり、読図の得点も高く、よく頑張っていた。

４日目。ことなみ未来館よりチーム行動スタート。選手の見送りをした後、監督隊は一足早くバスで大川山山頂へ。選手と合流し、下山は監督と選手の４名で楽しく下山。連日３５℃以上の高温多湿のなか、生徒はリタイヤどころかしっかりと規定時間を守りきり、どこか誇らしげな顔立ちであった。頼もしい４人と日本一広いため池の満濃池や香川の田園風景を見ながら下山。男女合わせて８名は３年生３人も含まれており、このメンバーで歩くことはもうないかなあー、と感慨深かった。

５日目が最終日。10:00 から閉会式。成績発表では地元香川県代表が上位に入り、会場をどよめかせた。来年は北海道。気持ちを新たに奮い立たせたい。

監督隊として、さまざまな都府県の先生方と語り合い、本当に楽しい毎日であった。また、これまで大会運営に携わった先生方とも交流し、来年度の大会運営に生かしていきたいと思う。

【８月９日　閉会式　旭川東Ａ隊･Ｂ隊】

（文責　旭川東高校山岳部顧問　飯田一三）

◎専門部より　令和４年度の活動を報告します。

１　第１回登山専門委員会
　令和４年５月６日(金)
　北海道旭川北高等学校(事務局校)
　議題
(1)令和3年度道登山専門部決算及び加盟金決算、令和4年度予算案について
(2)令和4年度道高体連登山専門部専門委員確認
(3)全国常任委員の確認
(4)令和4年度支部大会の開催予定、各支部加盟校、部員数、及び顧問の確認
(5)令和4年度全道大会について
(6)令和4年度～令和５年度全国大会について
(7)令和4年度以降の全道大会開催支部、当番校についての確認
(8)専門部事務局担当支部について
(9)北海道山岳連盟・高体連主催クライミング大会について
(10)その他・連絡事項

２　第２回登山専門委員会
　令和４年６月２１日(火)
　アートホテル旭川
(1) ペーパーテスト問題等の確認
(2) 大会説明(コース状況等)
(3) 通信体制
(4) 荒天対策　等

３　令和4年度第１回北海道高等学校選抜登山大会 兼 令和５年度全国高等学校総合体育大会登山大会第１回安全対策会議 兼 第３回北海道高等学校体育連盟登山専門部指導者研修会
　期日　令和４年９月１７日(土)～１９日(月)
　会場　黒岳～北鎮岳～裾合平　　旭岳
　　東川町民運動公園
　　東川町Ｂ＆Ｇ海洋センター
　参加校　男子 13 校　女子３校
　　参加人数　64 名
　成　績　男子　第一位　旭川東高等学校
　　第二位　旭川北高等学校
　　第三位　小樽潮陵高等学校
　　女子　第一位　札幌北高等学校
　　第二位　旭川東高等学校
　　第三位　旭川北高等学校

【９月１８日　３：３０　引継式】

【９月１８日　黒岳から北鎮岳へ】

【９月１９日　旭岳温泉　チーム行動開始】

【９月１９日　閉会式】

４　第３回登山専門委員会
令和４年２月３日(金)に予定
北海道旭川北高等学校

登　山

専門部長　稲　津　　誠
専門委員長　小　池　圭　太
〒078-8804　北海道旭川市緑が丘東４条 1-1-1
北海道旭川工業高等学校
ＴＥＬ　0166-65-4115
ＦＡＸ　0166-65-4127

◎第 62 回北海道高等学校登山選手権大会兼
第67回全国高等学校登山選手権大会北海道予選会

期　日　令和 5 年 6 月 20 日（火）～ 23 日（金）
会　場　旭岳
上ホロカメットク山・十勝岳
当番校　北海道旭川東高等学校
参加校　男子 14 校　女子 11 校
参加人数　100 名
成　績　男子　第１位　旭川東高等学校
第２位　旭川北高等学校
第３位　札幌北高等学校
女子　第１位　旭川東高等学校
第２位　旭川北高等学校
第３位　札幌北高等学校

令和５年度北海道総体のプレ大会としての位置づけで、インターハイの登山行動１日目に予定している上ホロカメットク山～十勝岳、３日目に予定している旭岳を会場として行われた。大会本部･幕営地についても、北海道総体と同じ東川Ｂ＆Ｇ海洋センター･東川町民運動公園とし、本番に向けてのシミュレーション大会となった。

昨年までは、新型コロナウイルス感染症対策により、テント泊人数の制限などがあったが令和元年の雌阿寒岳・雄阿寒岳大会以来４年ぶりに制限なしの大会となった。

大会初日の開会式、ペーパーテスト等は旭川市内のホテルで実施した。インターハイのプレ大会ということで、インターハイに関わる役員の方には出来る限り大会役員として参加してもらった。そのため、今までの全道大会よりも充実した体制で大会運営を行うことが出来た。

２日目の旭岳は、男女ともメインザックによる全装行動である。事前に申告としてもらいサブザック行動も可とした。ただし、今大会からはサブザック行動は賞典外の扱いとした。インターハイに合わせて、姿見の池まではチーム行動を実施した。男子隊は行動離脱が２チーム、隊離脱が２チームだった。離脱していないチームで規定時間の１１０分をオーバーしたのは１チームだった。女子隊は最初から５チームがサブザック行動だったこともあり、すべてのチームが規定時間内で行動することができた。姿見の池からは隊行動で山頂を目指した。旭岳山頂は視界も良く、大雪山系を見渡せる素晴らしい天気であった。

【大会２日目　旭岳に登頂した女子隊】

下山後は東川町民運動公園において，幕営審査と調理審査を行った。調理に関しては、レトルトのみで減点されたチームはあったが、多くのチームが工夫されていた。

３日目は、十勝岳温泉登山口から上ホロカメットク山、十勝岳を目指すコースである。この日も天候に恵まれ、予定通りの登山行動ができた。男子隊は昨日の状況などから判断し、３チームがサブザック行動となった。女子隊は前日に続き５チームがサブザック行動とし、すべてのチームが歩ききった。３００階段から上富良野岳への登り、そして十勝岳へ向かう最後の登りでは、体力差が出た。全装行動ということで荷物の重量も、大きく影響したと思われる。荷物の中身は精査し、可能な限り軽くすることも登山技術として大切である。体力は有限である。少しでも体力を消耗しない登山を心がけて欲しい。

【大会３日目　十勝岳への最後の登り】

下山後は幕営地である東川町民運動公園で交流会を行った。交流会は４年ぶりである。２日間一緒に登山した選手達が楽しそうに交流する姿は、ようやく元の登山大会が戻ってきたと実感した。登山大会では登山技術を競い合うことも大事だが、選手同士、顧問同士が交流することによって、全体的に登山技術が向上することを是非期待したい。

今年度はいよいよインターハイ本番である。問題点を洗い出し、円滑な大会運営ができるよう模索したい。また、今大会はチーム行動を実施した。北海道インターハイが終わった後も、全道大会においてチーム行動を実施していきたい。それは各チームが登山技術を発揮するのに適した登山行動であり、選手も非常に積極的に行動していたからである。もちろん危険箇所があるようなコースでは隊行動が基本になると思うが、是非今後も続けて欲しい。最後に様々な状況に応じて大会運営をしていただいた当番校旭川東高等学校の先生方には改めて謝辞を申し上げたい。また、インターハイのプレ大会ではあったが大きな問題もなく大会が終えられたことに、携わっていただいたすべて方に感謝したい。

◎令和５年度全国高等学校総合体育大会登山大会
　第 67 回全国高等学校登山大会
期　日　令和５年８月７日（月）～ 11 日（金）
会　場　北海道東川町、上川町、上富良野町、
　　美瑛町
　　十勝岳、黒岳～北鎮岳、旭岳

多くの方々にご協力いただき、令和５年度全国

高校総体登山大会を無事に終了することができた。36年ぶりに開催された北海道インターハイは、まずはインターハイを知るところから準備が始まった大会であった。またコース設定は、大雪山を縦走するという北海道の山を代表する素晴らしいコースであったが、エスケープルートが無いなどの懸案事項もあった。しかし、大きな事故など無く大会を終えることができた。ご協力いただいた多くの方に感謝申し上げ、この大会を振り返りたい。

１日目。今大会は４年ぶりにテント泊や炊事などが復活した。ようやく元に戻った大会であった。開会式においてもアトラクションが行われた。旭川東高校の生徒達からの歓迎があり、大会は開幕した。開会式後はすぐに知識審査及び気象審査を行い昼食となった。幕営地到着後はすぐに装備審査、そしてチームごとの写真撮影と続き、全体の動きを指示するのが大変だったが、班長と副班長の臨機応変な対応によって、何とかスムーズに進めることができた。

２日目。朝、コースの変更が連絡された。変更内容は、全装行動からサブザック行動とする、コースを上ホロカメットク山の往復登山とすることであった。理由は新型コロナウイルスの感染者が選手等から出ている状況を勘案して総合的に判断したとのことである。十勝岳に行けないことは非常に残念であったが、登山行動開始前でのコース変更は、ある意味で気が楽になった。この日はすべて班行動である。１班から３分ごとにスタートしていった。歩き出しの序盤から雨粒が空から落ちてくる中、予定取りのペースで隊は進んでいった。

【３００階段の上から見えた雲海】

３００階段を上りきったあたりでは雨は非常に弱くなり、上ホロカメットク山の頂上が目視できるくらい明るくなる瞬間もあった。上ホロカメットク山の頂上では、ガスが濃かったが、雨は無く風も弱く、予定通り休憩することができた。短い時間でも、十勝岳連峰の壮大な自然を見ることができて良かった。下山後に幕営地に戻ると、スコールのような激しい雨によって、完全に水没してしまった。避難場所として指定していた東川高校の体育館に移動することになった。結果的には体育館で引き継ぎ式を行い、その日の夜は体育館で寝ることになった。Ｂ隊はさらに隣の東川中学校の体育館で寝ることになった。

３日目。この日は今大会で一番のメインとなる大雪山の縦走コースである。相変わらず天気予報はよく無いが、計画通りに引き継ぎ式が行われてバスは出発した。層雲峡駅からのロープウェイも、ほぼ計画通り乗車できた。黒岳リフトを乗り継ぎ、順調に登山口に到着した。ここから黒岳の頂上までは班行動である。黒岳５合目駅でトイレに行った選手が数人いて、若干遅れたが全ての班がほぼ予定通りに出発した。黒岳頂上までの班行動は、離脱するチームもなく全選手がチーム行動に移ることができた。この大雪山で全国の高校生がチーム行動でスタートしていく姿を見て、本当に今まで準備してきてよかったと感じた瞬間であった。また、天候もそれを讃えるかのように青空が見えていた。選手たちは勢いよく黒岳頂上を後にし、北鎮岳を目指して歩いていった。

【黒岳の頂上からチーム行動がスタート】

途中のお鉢平展望台からは、大雪山のお鉢がきれいに見ることが出来た。北鎮分岐から北鎮岳の間は、ガスが濃く、眺望を楽しむことは出来なかったが、何とか雨も降ることなく登山行動を進めることができた。結果的には１チームも離脱することなくゴールの姿見駅までたどり着いた。この日は幕営地で引き継ぎ式を行い、選手はそれぞれのテントで夜を迎えることができた。

４日目。登山行動最終日は北海道の最高峰旭岳の往復登山である。天候も当初の予報に反して、悪くなかった。ただ、前日の夜は気温が下がらず、非常に蒸し暑い夜だった。おそらく選手のテントの中は、蒸し風呂のような状態だったと察する。寝ることができなかった選手も多かったようだ。

登山口に到着すると、すでにチェックポイント隊がチーム行動スタートの準備をしていた。予定通り姿見までのチーム行動がスタートした。この日は結果的に今大会唯一の全装行動であった。盤の沢の登りで１チームが離脱となった。熱中症のような症状で、すぐに支援隊に引き渡し、看護師と医師の支援を受けた。気温が若干高いことと、ザックが重いこと、そして、３日間の行動の疲れがここで出ている様であった。姿見からは班行動である。班行動は定刻にスタートした。旭岳を覆っていたガスも、徐々に晴れてきて、十勝岳連峰やトムラウシ山まで見ることができた。しかし、全装行動での旭岳の登りは厳しく、すぐに２チームが班離脱となり、隊であずかった。

【噴煙を見ながら班行動で頂上を目指す】

監督隊も予定していたコースタイムで頂上まで登り、頂上では選手から拍手で迎えられていた。ガスがかかったり晴れたりを繰り返す頂上では、監督と選手が一緒に写真を撮ったり、食事をしたり自由な光景が広がっていた。何より風が無いのが幸いである。

ここからはパーティ行動となる。監督と選手が

一緒に下山していく姿は、なんとも微笑ましく感じた。往復登山なので、下山はB隊とすれ違う。Ａ隊とＢ隊が互いに声を掛け合いながらの下山は、この登山大会における頑張りを、互いに讃えているようで微笑ましかった。予定通り選手、監督、役員はロープウェイで下山し、バスに乗車した。最後はエアコンの効いた東川町農村環境改善センターで解散式を行った。

【班ごとに最後の交流をした解散式】

５日目が最終日。開会式と同じ旭川市民文化会館に集まり、閉会式が行われた。高校総体登山大会もいよいよフィナーレである。結果発表では、喜びで涙ぐむ選手の姿を見て、一生に一度しか無い高校生活で、登山競技に全力をかけてきた思いを感じた。閉会式ではＡ隊のコース旗を次年度開催県となる福岡県のＡ隊コース隊長に引き継いだ。北の北海道から次は南の九州である。福岡インターハイの成功を祈りつつ、コース旗を引き継いで握手を交わした。今回のインターハイの登山競技を通して、いろいろな人と出会い、登山の素晴らしさにあらためて気付かされた。最後に登山大会の役員、監督、選手、関係する全ての人に感謝申しあげて行動記録としたい。本当にありがとうございました。

（文責　登山専門部専門委員長　小池　圭太）

◎専門部より　令和５年度の活動を報告します。

１　第１回登山専門委員会
　令和５年５月８日(月)
　北海道旭川工業高等学校(事務局校)
　議題
(1)令和4年度道登山専門部決算及び加盟金決算、令和5年度予算案について
(2)令和5年度道高体連登山専門部専門委員確認
(3)全国常任委員の確認
(4)令和5年度支部大会の開催予定、各支部加盟校、部員数、及び顧問の確認
(5)令和5年度全道大会について
(6)令和5年度～令和6年度全国大会について
(7)令和5年度以降の全道大会開催支部、当番校についての確認
(8)専門部事務局担当支部について
(9)北海道山岳連盟・高体連主催クライミング大会について
(10)その他・連絡事項

２　第２回登山専門委員会
　令和５年６月２０日(火)
　アートホテル旭川
(1) ペーパーテスト問題等の確認
(2) 大会説明(コース状況等)
(3) 通信体制
(4) 荒天対策　等

３　令和5年度第２回北海道高等学校選抜登山大会
　期　日　令和５年９月１６日(土)～１７日(日)
　会　場　富良野市　山部自然公園太陽の里
　　芦別岳（新道コース）
　参加校　男子13校　女子7校
　　参加人数　72名
　成　績　男子　第１位　旭川東高等学校
　　第２位　旭川北高等学校
　　第３位　小樽潮陵高等学校
　　女子　第１位　旭川東高等学校
　　第２位　釧路湖陵高等学校
　　第３位　北広島高等学校

４　第３回登山専門委員会
　令和６年２月２日(金)に予定
　深川市　ネイパル深川

５　登山専門部指導者研修会
　令和６年２月３日(土)に予定
　深川市　ネイパル深川

登　山

専門部長　中　島　泰　彰
専門委員長　小　池　圭　太
〒078-8804　北海道旭川市緑が丘東４条 1-1-1
北海道旭川工業高等学校
ＴＥＬ　0166-65-4115
ＦＡＸ　0166-65-4127

◎第 63 回北海道高等学校登山選手権大会兼
第68回全国高等学校登山選手権大会北海道予選会

期　日　令和 6 年 6 月 25 日（火）～ 28 日（金）
会　場　ニセコ連峰、羊蹄山
当番校　北海道小樽潮陵高等学校
参加校　男子 15 校　女子 13 校
参加人数　112 名
成　績　男子　第１位　旭川東高等学校
第２位　釧路湖陵高等学校
第３位　小樽潮陵高等学校
女子　第１位　旭川東高等学校
第２位　釧路湖陵高等学校
第３位　旭川北高等学校

昨年度までは北海道インターハイのプレ大会の位置づけもあり、令和３年から３年連続で大雪山系で全道大会を行った。今大会はニセコ連峰、羊蹄山が会場ということで、久しぶりに大雪山系では無い山域での大会である。

大会１日目は、ニセコ町のヒルトンニセコビレッジに集結し、開会式とペーパーテスト等を実施した。今大会から、初めて引率顧問と監督の全員に大会役員をお願いした。全道の加盟校数も２５校まで減少しており、これからは全員で大会運営を行うことになっていくことは避けられないのが現状である。そのため、顧問会議では登山行動の体制などについて多くの質問が出た。これからの登山大会のスタンダードになるように、細かい懸案を解消し、標準化していきたい。

大会２日目はニセコ連峰縦走コースである。男子は全装行動であるが、１チームがサブザック行動を申し出たため、賞典外として認められた。女子はサブザック行動である。雨は降っていないが、濃いガスの中、パノラマ峠までのチーム行動がスタートした。イワオヌプリ周回路は、霧が濃いため、ピンクテープを探しながらの行動となった。道迷いの危険があるルートだが、全チーム無事に通過した。ニトヌプリへの向かう途中は、一部登山道が崩壊していたため、当番校が FIX ロープをかけて対応した。ニトヌプリの下りなどは濡れた岩に泥がついて滑りやすく、雨具のパンツを見ると、尻まで泥だらけになっていたことが選手の苦闘を物語っている。パノラマ峠に着く頃には、天気もしだいに弱い雨に変わり、気温も低く厳しい山行になった。ここで男子２チームが離脱となった。ここからはチセヌプリを目指し、隊行動である。すでにだいぶ消耗した選手も多く、ゴールの神仙沼までで男子の３チームが遅れたが、最後まで歩ききった。女子はサブザック行動ということもあり、離脱したチームは無かった。神仙沼では雨もだいぶ強くなっていた。

神仙沼からはバスで幕営地である真狩キャンプ場へ移動した。真狩キャンプ場は晴れており、日差しがとても暖かく感じられた。幕営地で幕営審査と炊事審査が行われた。ここ数年は新型コロナ感染症対策として、お弁当の配付など行われてきたが、今大会からは、すべて自炊する元の大会に戻った。各チーム防腐対策などを工夫して炊事を行っていた。

【雨のパノラマ峠を出発する女子隊】

大会３日目は、羊蹄山である。真狩コースを登り、比羅夫コースで下りるコース設定である。昨日とは違い、空は明るく気持ちの良い朝であった。男女ともにサブザック行動であり、避難小屋まではチーム行動である。男子も荷物が軽いこともあり、昨日離脱したチームも元気に避難小屋に到着していた。避難小屋ではトイレを使用できるが、３００円を協力金として納めることになっている。避難小屋があるだけで、安心感がだいぶ違う。

【避難小屋で休憩する男子隊】

ここからは体制を整えて、隊行動になる。比羅夫コースとの合流点くらいまでは、非常に展望も良く、気持ちの良い登山であったが、次第にガスが発生してきた。火口の縁に出るあたりでは、だいぶガスが濃くなり、残念ながら眺望が無くなってしまった。また、強風と低温で厳しい山行となった。ただ、ときおりガスの切れ目から眺望があり、晴れることを期待しながらピークを目指した。山頂では風のあたらないところで休憩し、写真を撮った。

【最後の急登に向かう女子隊】

ここからは長い下りである。各チーム疲れもあり、男子は１チーム、女子は２チームが遅れたが全てのチームが歩ききった。登山口からバスで移動し、交流会を行った。

【羊蹄山頂上での集合写真】

大会４日目は審査委員会と閉会式である。審査委員会では、ペーパーテストの出題内容について、しつこく抗議したチームがあったと報告があり、そのチームはマナー点で減点した。度が過ぎた大会運営へのクレームは、スポーツマンとしての態度に反するという結論であった。非常に残念である。

今大会から変更になった事について確認しておく。まず、ペーパーテストを４名から３名に変更し、天気図と並行して実施した。つまり、３名がペーパーテストで１名が天気図とした。その意図は、インターハイに合わせることと、天気図担当の選手の持ち点が大き過ぎたので、これを是正した。また、大会運営における時間短縮にもなった。大会山域のコース概況を web ページで事前公開した。そして、そこからペーパーテストに出題した。インターハイの予報１号のように、事前に提示することにより、勉強しやすいようにした。これらの変更は、次年度以降の大会でも継続する予定である。

顧問、監督がすべて大会役員に入ることも継続して行う予定である。大会後には「結果として多くの先生とコミュニケーションをとることが出来た。仲良くなった」「審査を担当してみて、実際の審査の観点についてよく理解できた」など肯定的な意見が多かった。これからの北海道登山専門部のマンパワーも限られている。全員の力を合わせて、今後も取り組んでいきたい。最後に、多大

な事前準備や、様々な状況に応じて大会運営をしていただいた当番校小樽潮陵高等学校の先生方に改めて謝辞を申し上げたい。また、今大会が大きな問題なく終えることができたことに、携わっていただいたすべて方に感謝申しあげます。ご協力ありがとうございました。

◎令和６年度全国高等学校総合体育大会登山大会
　第68回全国高等学校登山大会
期　日　令和６年８月２日（金）～６日（火）
会　場　福岡県田川郡添田町
　　英彦山、岳滅鬼山
成　績　男子　優　勝　旭川東高等学校
　　女子　準優勝　旭川東高等学校

【閉会式会場で旭川東の男子と女子】

まず最初に、旭川東高校山岳部男子が北海道勢として初めて優勝し、高校山岳部の日本一に輝いた。また、女子も準優勝という快挙であった。過去を振り返っても、特に近年はインターハイにおいて北海道のチームはなかなか結果が出せなかった。昨年度の北海道インターハイも、あと少しのところでミスがあり入賞を逃した。その悔しさなどもあったと思うが、最高の結果に関係者は歓喜に沸いた夏となった。

８月２日（金）、開会式が添田町のオークホールで行われた。式の前に、福岡県立筑紫丘高校のギターアンサンブル部による歓迎のアトラクションで会場は盛り上がった。例年では開会式会場に各都道府県の高体連旗がすべて掲揚されるが、スペースの関係等で選手の紹介と同時にスライドショーで高体連旗がスクリーンに映し出される演出で開会式が始まった。開会式後に登山隊が編成されると、すぐに A 隊、B 隊ともバスに乗車し英彦山青年の家へ向かった。昼食後、青年の家の研修室で各テスト及び講堂で天気図作成が行われた。英彦山青年の家は標高約８００ｍあり、オー

クホールに比べればだいぶ涼しいが、それでも夏の強い日差しで幕営地のグランドは熱せられていた。体育館でコース隊が編成されると、青年の家の正面で引き継ぎ式が行われ、グランドで設営審査、炊事審査が行われた。

翌日からは登山行動の開始である。英彦山は修験道の山として栄えた歴史のある山である。多くの里道が存在しており、今大会のコースは、英彦山を中心に周辺の道を歩くコース設定であった。A 隊の中岳コースは一度雲母坂まで下り、そこから参道を銅鳥居、奉納殿、中岳、北岳と登り高住神社に下りるルートである。雲母坂から中岳までは、標高差で約８００ ｍ ある。石段の登りは歩幅が決まらず、さらにメインザックの全装行動は体力を消耗させた。B 隊の南岳コースは高住神社からケルンの谷を経由して、英彦山で最高峰の南岳を目指すルートである。

【チーム行動中の旭川東女子】

行動２日目は A 隊と B 隊のコースが入れ替わった。前日に熱中症などでリタイアするチームが複数出たため、コースが若干短縮されることになった。ただ、行動２日目も前日の疲労と暑さなどでリタイアするチームが出た。昨今のインターハイは暑さへの対応と体調管理が重要である。自分達で作った食事、テントでの睡眠、体力や知識などを含めて総合的な山の強さが求められる。

【行動開始前の旭川東男子】

行動３日目は、奉幣殿を通過して汐井川を徒渉し、岳滅鬼山を目指すコースである。深倉分岐からは監督も一緒に行動するパーティ行動である。

【岳滅鬼山頂上で旭川東女子の監督と選手】

斫石峠まで縦走すると、今大会の登山行動も終了である。発達した積乱雲が近づいてきたが、何とか雨には当たらなかった。結果的に天候に恵まれた大会であった。閉会式は開会式と同じオークホールで行われた。審査員長による緊張の成績発表では、旭川東高校が呼ばれると、会場にはどよめきと歓喜が広がった。北海道のチームは今までなかなか結果が出せなかったが、男子、女子ともに本当によく頑張った思う。また、この結果は旭川東高校の選手だけではなく、北海道の山岳部の生徒達への評価でもあると感じた。これから益々、北海道の高校山岳部が意欲的に山行を重ね、山の楽しさと安全登山の技術を広めていって欲しいと思う。最後に今大会に関わった多くの関係者に感謝申し上げて、大会の報告とします。ありがとうございました。

（文責　登山専門部専門委員長　小池　圭太）

◎令和６年度第３回北海道高等学校選抜登山大会

期　日　令和６年８月２４日(土)～２５日(日)
会　場　美瑛町　国立大雪青少年交流の家
　　美瑛岳（望岳台コース）
参加校　男子13校　女子9校
　　参加人数　80名
成　績　男子　第１位　遠軽高等学校
　　第２位　釧路湖陵高等学校
　　第３位　旭川北高等学校
　　女子　第１位　旭川東高等学校
　　第２位　釧路湖陵高等学校
　　第３位　室蘭栄高等学校

◎専門部より　令和６年度の活動を報告します。

１　第１回登山専門委員会
　令和６年５月７日(火)
　北海道旭川工業高等学校(事務局校)
　議題
(1)令和5年度道登山専門部決算及び加盟金決算、令和6年度予算案について
(2)令和6年度道高体連登山専門部専門委員確認
(3)全国常任委員の確認
(4)令和6年度支部大会の開催予定、各支部加盟校、部員数、及び顧問の確認
(5)令和6年度全道大会について
(6)令和6年度～令和7年度全国大会について
(7)令和7年度以降の全道大会開催支部、当番校についての確認
(8)専門部事務局担当支部について
(9)北海道山岳連盟・高体連主催クライミング大会について
(10)その他・連絡事項

２　第２回登山専門委員会
　令和６年６月２５日(火)
　ヒルトンニセコビレッジ
(1) ペーパーテスト問題等の確認
(2) 大会説明(コース状況等)
(3) 通信体制
(4) 荒天対策　等

３　高等学校登山指導者研修会（夏）
　令和６年９月２８日(土)、２９日(日)
　札幌市　定山渓自然の村
　コビキ沢（神威岳)、ラルマナイ川（金山沢)
　参加者８名

４　第３回登山専門委員会
　令和７年２月７日(金)に予定
　深川市　ネイパル深川

５　高等学校登山指導者研修会（冬）
　令和７年２月７日(金)、８日(土)に予定
　深川市　ネイパル深川
　スポーツクライミング、山岳スキー

登　山

専門部長　松　田　素　寛
専門委員長　三　戸　　渉
〒050-0083　北海道室蘭市東町 3-29-5
北海道室蘭栄高等学校
TEL　0143-44-3128
FAX　0143-44-3129

◎第 64 回北海道高等学校登山選手権大会兼
第 69 回全国高等学校登山選手権大会北海道予選会

期　日　令和 7 年 6 月 24 日(火)～27 日(金)
会　場　神居尻山、暑寒別岳
当番校　北海道岩見沢東高等学校
参加校　男子：１５校６０名
　　女子：１３校５２名
　　選手合計：１１２名
　　競技役員：４８名（監督２８名を含む）
成　績　男子　第１位　北海道旭川東高等学校
　　第２位　北海道釧路湖陵高等学校
　　第３位　北海道札幌北高等学校
　　女子　第１位　北海道旭川東高等学校
　　第２位　北海道札幌北高等学校
　　第３位　北海道釧路湖陵高等学校

参加校数は昨年と同様に、男子が 15 校、女子もそれに迫る 13 校が出場し選手合計 112 名が参加した。チーム数は変わらないが高校数の減少により役員数は減少、どの役割も例年より少ない人員配置となった。

大会初日は道民の森にて開会前に専門委員会や安全対策会議等が行われ、安全対策や審査に関わる注意事項等が確認された。その後、開会式と、ペーパーテスト、天気図審査、装備審査が行われた。開会式では審査委員長より熱中症への注意喚起について話された。ペーパーテストについては、毎年、研究課題が設定されており、今年度は「熱中症対策」が課題となっていたため、各チームは事前に作成する計画書に、自分たちで調べた熱中症対策についてをまとめていた。

登山 1 日目は山頂付近の熱中症指数は２１～２２、気温２５～２６度、湿度４６％と気温が高く、天候は良好の中での登山となった。また、全装行動で 7 時コテージ前集合・出発であったが、整列・装備審査を行い、登山口出発は 17 分遅れて出発した。約 40 分後、男子 1 校の生徒が動けない状態になりサポートに預けて下山した。その 15 分後に同じく男子 1 校が下山。5 分後には男子 1 校が下山となった。8 時 53 分男子 1 校の生徒が吐き気を催し、この後チームは下山した。原因の多くは足に痛みや、吐き気などの熱中症症状であった。女子隊は男子隊の状況を受けて、休憩を取りつつ山行を継続。男子隊も女子隊も山頂到着予定 11 時より１時間以上早い時間に到着。（女子隊は９時５２分頃山頂到着）本部では、下山した男子４チームをスタートの登山口からコテージに搬送し休憩させた。１１時２０分頃、コースパーロットより無線連絡が在りゴールであるキャンプ場は気温２８度、熱中症指数２３と連絡あり。山頂まで到達した男子１校は体力的に厳しい状態でサポートと下山することとなった。男子隊が到着したのは１２時１５分頃、到着予定の１３時を大きく上回って到着した。女子隊は１３時１０分頃到着。男子隊・女子隊は到着後３０分の休憩の後、設営審査・炊事審査を実施した。男子隊は４校がリタイヤ、女子隊はサブザックの女子チームを含めて全員が最後までコースを歩ききった。

【神居尻山山頂から稜線を歩く】

登山２日目は、天気は曇りで前日と比較して気温が

低かった。この日の登山はサブザック行動で、山頂まではチーム行動、山頂までは隊行動である。道民の森の出発は予定通りであったが、男子隊（１号車・２号車）が立ち寄る予定のトイレが工事中でトイレ休憩をもうけずに暑寒荘に向かった。男子隊のトイレ休憩は暑寒荘で対応した。女子隊は女子１校の生徒が吐き気を催し、出発から約３０分の浜益海浜公園のトイレで休憩。もう１台は予定のトイレで休憩後、予定通り暑寒荘に到着した。吐き気を催した生徒は、前日の熱中症のダメージかバス酔いが影響したかもしれない。出発前から想定のない動きはあったが、登山開始は装備審査後に予定の６時から各グループが順次出発することができた。５合目の規定時間少し過ぎて最後尾の男子チームが到達。女子隊は規定時間を過ぎたチームはいなかった。男子３校が５合目でリタイヤを決定。女子１校は５合目で体調を確認し、さらに進んだが６合目で１人の選手が動けなくなり下山した。昨日の熱中症のダメージも疑われることから、５合目でのリタイヤを選択するべきだったかもしれない。また、下山の際に先に進んでいる役員が戻って下山する予定で連絡を取り合っていたが、後ろのサポートが追いついて、後ろのサポートが下山に付き添うことになった。事前に決まっていたことが覆ることになったことは連絡体制における課題が残った。コースパイロットが山頂に到達した時点では山頂はガスが掛かった状態で風は３～５ｍほど、熱中症指数は１９であった。男子隊が山頂に到着した頃（９時３０分過ぎ）は快晴で、見晴らしが良かったという。女子隊は１０時頃暑寒コース９合目を最後尾が通過。山頂からの下山は隊行動で、男子隊は予定の１０時３０分より１５分早く下山開始し１０時３０分には９合目に到達していた。女子隊は１２時時点で箸別コース８合目に到達。予定よりは１時間ほど遅れ。６月第１週目、第２週目と当番校で下見をした際には、雪渓が多く迷う箇所が幾つもあったが、地元の増毛町役場の方でコース旗を１０箇所以上設置いただいたおかげで、迷うことはなかったと思う。また、大会前１週間で雪渓はかなり溶け、箸別コースの５合目から４合目の急な斜面に固く残った雪渓の危険性について事前に会議で対応について協議したが、消失していた。男子隊到着は予定より１時間早い１２時３０分頃。女子隊は予定から１時間３０分遅れで１５時に登山口に到着した。前日の熱中症や選手の疲れを配慮してのことだと思われる。

【暑寒別岳山頂で集合写真】

両日とも暑さが課題となる厳しい山行であった。大きな事故はなかったが、熱中症対策には課題が残った。熱中症の症状や疲れ、足の痛み、体力不足等でリタイヤが相次いだ。当番校としては熱中症対策として対策用品を揃えるなど事前準備が出来たと感じる。

登山前に行われた安全対策委員会において協議に上がった熱中症対策に対して、事前に全装行動をサブザック行動にすることや、ペースを抑えることが上がっていた。また、１日目の登山を終えて、熱中症のダメージや足の疲れを抱えて、２日目の登山に参加するか否かの判断を確認する高校が２校あったがいずれも2 日目は参加し、そのうち 1 校はリタイヤしている。熱中症については、本人では判断できない難しい症状だと感じた。1 日目を終えて各校の顧問が生徒の状態を把握していたが、隊長副隊長には伝わっておらず、判断のズレが生じた。顧問と隊長副隊長で情報共有出来る体制を考える必要がある。今大会では養護教諭や看護師等の医療従事者を依頼しなかったが、登山の競技性から考慮すべき事案を感じる。サポート隊に無線機を持っている役員が不足しており、専門部では無線機が余っていたことからサポート隊への無線機の配置の確認が必要であった。

全体評価について、男子隊、女子隊ともに 5 位以上が 90 点を超えており、女子隊の 2 位と 3 位はわずか 0.6 点の差であった。講評では「行動中に手に不要なものを持っている。」「天気図の練習不足。」「設営審査からは用意すべきものは持ってきているが、なぜ必要

なのかを理解していない。」「計画書には不必要な記載はしない。」「ゼッケンが見えるように確認する。」「重い荷物を背負って歩く訓練や、急登を登る練習をすること。」が挙げられた。

◎令和７年度全国高等学校総合体育大会登山大会

第68回全国高等学校登山大会
期　日　令和７年８月６日(木)～10日(月)
会　場　広島県山県郡安芸太田町
　　恐羅漢山、十方山、深入山
成　績　男子　第15位　旭川東高等学校
　　女子　第７位　旭川東高等学校

今年度も男女とも旭川東高校が北海道代表としてインターハイに出場した。昨年度は男子が優勝、女子が準優勝だったことから、選手はプレッシャーもあったかもしれないが、そのことを感じさせない姿だった。

大会初日は開会式、ペーパーテスト、天気図審査、装備審査、設営審査、炊事審査が行われた。

２日目からは登山行動で、この日は恐羅漢レストハウス前からスタート。夏焼けのキビレ～早手のキビレ分岐を経て、中ノ甲林道終点へ。そこから台所原平～台所原～恐羅漢山～旧羅漢山を巡り、獅子ヶ谷登山口～二軒小屋駐車場へというルート。広島にとって特別な「８月６日」に競技が行われたため、午前８時１５分には行動を一時中断し、選手・役員全員で黙祷を捧げた。下山後には幕営地にて設営及び炊事審査が予定されていたが、天候悪化の予報により体育館へと避難するため、中止となった。

大会３日目は、前日に引き続き強風と雷雨の影響で、登山行動は大幅に短縮を余儀なくされ、予定いていたコースの最初の林道区間のみを歩き、地点確認の審査が行われた。午後からは天候回復が見られ、幕営地に戻って設営審査と炊事審査が行われた。１日目に装備審査を行った大量の日除けテントは全て一所に圧縮されたかのような無残な姿となっており、前日の体育館への避難がなければ最悪の事態も考えられるほどの被害であり、改めて自然の驚異を思い知らされた。

４日目は幕営地の目前にある深入山への登山で審査は終了し、その後選手は監督と合流し、名勝地である三段峡を登り、川下りを楽しんだ。

大会最終日、閉会式では結果発表と表彰が行われ、旭川東高校男子の連覇、女子のリベンジは残念ながら果たすことができなかったが、男子98.7点、女子99.3点と堂々たる戦いぶりを見せた。

全道大会においては、旭川東に追いつけ追い越せと切磋琢磨を続けている。２年前の北海道インターハイを、何年もかけてオール北海道で準備し、運営をした経験が、北海道の高校登山のレベルを大きく向上させたと感じている。次年度以降の全道大会、インターハイにも期待している。

◎令和7年度第4回北海道高等学校選抜登山大会

期　日　令和７年８月23日(土)～24日(日)
会　場　室蘭市　だんパラ公園
　　室蘭岳・カムイヌプリ
参加校　男子13校　女子６校
　　参加人数　76名
成　績　男子　第１位　北海道旭川東高等学校
　　第２位　北海道旭川工業高等学校
　　第３位　北海道室蘭栄高等学校
　　女子　第１位　北海道北広島高等学校
　　第２位　北海道旭川東高等学校
　　第３位　北海道室蘭栄高等学校

今年度より共催大会となった選抜大会は、室蘭岳（鷲別岳）で行われた。６月の全道大会で熱中症対策についてが課題として挙がっていたため、真夏に行われる今大会はより一層の対策が求められた。

具体策として新たに試みたのは、選手の体調管理について、体調管理シートへの記入と提出を義務づけ、登山行動をする日の朝の出発前に監督である各校顧問の確認を経て、大会本部へ提出することとした。また、経口補水液を運営側で選手全員分を用意、配布し、登山行動中は全員が必ず持つこととした。重量やパッキングのしやすさを考慮し、パウチ型のゼリータイプ200ｇを１人１人が持つことで、チーム内に熱中症患者が出た場合には対応できるようにした。土地柄、室蘭では道内他地区と比べれば気温は低く、海風により過ごしやすい気候であることは幸いであった。サポー

ト体制としては登山ルート各所に大会役員を配置し、選手が体調不良等の場合にはすぐに頼れる大人が近くにいるようにしており、実際に体調不良者が出た場合には極力当該校顧問が生徒を引率して下山することを事前に確認した。この点については今までの大会においても配慮、確認している点ではあるが、顧問が全員大会役員として持ち場があるために、顧問が付き添えない場合にはサポート係の役員が付き添うことになっている。今大会においては熱中症ではなかったが男子１チームが体調不良を訴え、副隊長、サポート、顧問で選手の状況を確認の上、顧問が付き添って下山した。また女子１チームは体力の限界により、短縮ルートによる下山を選択し、顧問とサポート役員も付き添い下山した。

登山行動中は天候が非常に良く、山頂からの眺望は遠く海の向こうの青森県下北半島まで見通すことができ、登り慣れた室蘭の選手や顧問からも驚きの声が漏れるほどであった。心配された熱中症を訴える選手は出なかった。気温がさほど高くならなかったことと、夏も終わりに近づく時期のため、暑熱順化が十分になされていたことが理由として考えられる。次年度の全道大会へ向けて、各校顧問及び選手には重荷を背負って暑熱順化をすることの重要性を周知していく。

【朝焼けの中、室蘭岳を目指しスタート】

◎登山専門部 活動報告

1、第１回登山専門委員会

令和７年５月７日(水)北海道室蘭栄高等学校

議題

(1)令和 6 年度道登山専門部決算及び加盟金決算、令和７年度予算案について

(2)令和７年度道高体連登山専門部専門委員確認

(3)全国常任委員の確認

(4)令和７年度支部大会の開催予定、各支部加盟校、部員数、及び顧問の確認

(5)令和７年度全道大会について

(6)令和７年度~令和７年度全国大会について

(7)令和 8 年度以降の全道大会開催支部、当番校についての確認

(8)専門部事務局担当支部について

(9)北海道山岳連盟・高体連主催クライミング大会について

(10) その他・連絡事項

2、第２回登山専門委員会

令和７年６月 24 日(火)道民の森

(1) ペーパーテスト問題等の確認

(2) 大会説明(コース状況等)

(3)通信体制

(4)荒天対策等

3、高等学校登山指導者研修会(夏)

令和７年９月 27 日(土)、28 日(日)

登別市 ふぉれすと鉱山

三重の沢(白老川)、滝沢(鷲別来馬川)

参加者７名

4、第３回登山専門委員会

令和８年２月７日(金)に予定

室蘭市 サンパワー380

5、高等学校登山指導者研修会(冬)

令和８年２月７日(金)、８日(土)に予定

室蘭市 サンパワー380

スポーツクライミング、山岳スキー